
自分らしい生き方を

A - G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分らしい生き方を

【Nコード】

N7202Y

【作者名】

A - G

【あらすじ】

所謂マンガやアニメへの転生もの。

主役になるには中途半端な主人公。というより内面がネガティブな上、他者に見せる自分もコントロール仕切れずブレている。

人としての軸が定まっていない彼が物語の登場人物と接触し触れ合っていくことで、成りたかった自分に成ることは出来るだろうか？

(鬱陶しいヤツなので成長してくれないと困ります)

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙いどころか拙過ぎる文章です。

ご指摘や感想など頂ければ幸いです。

プロローグ

俺は今、自分の人生を振り返っていた。
というか無理矢理振り返させられている。

俺の目の前には巨大なスクリーンがあり、さながら映画館のように妙に広く暗い空間に俺一人だけが座り、流れる映像を羞恥心とか不快感とか諦観とかをグチャ混ぜにした「いつそのこと殺して下さい」という気持ちで眺めている。

「もう死んでるのに殺してなんてナンセンスだねえ」

俺が生まれてから幼少期、少年期、青年期と今に至るまでの成長してきた流れを結婚式なんかで使われるようなダイジェストストーリーで編集されているのだが……

「こんなのが結婚式で流されたら千年の恋も冷めちゃうだろうねえ。花嫁さんからしたら夢から醒めさせられたかな？」

内容は悪意で編集されたとしか言いようがない。
適当な言葉で誤魔化し、嘯く自分。

他人と当たり障りのない付き合いをし、決して本心を明かさない自分。
いい加減で乱雑で卑怯で臆病で見るに耐えない自分。
作り過ぎて着飾り過ぎていい人になるように形作り、そんな自分に
自分ですら持て余す。

「自分を見失うってヤツかな？でもそれを冷静に眺める自分にちょっと酔ってる感じ？」

気持ち悪い。

「うん。ぶつちやけマジキモい」

醜いし無様だ。

吐き気がする。殴り飛ばしてやりたい。

こんなヤツ嫌いだ。

こんな自分が本当に嫌いだ。

「僕も嫌いだねえ。エヴァンゲリオン観たとき、シンジ君にも同じ気持ちを持ったねえ。まあ彼の場合は生まれ育った環境に問題があるとフォローを入れてあげるけど。因みに僕はアンチじゃないよ？好きだからこそ苦言を呈すタイプさ」

なんでこんなヤツが俺なんだ。

知れば知るほど、見れば見るほどに嫌になってくる。

悪意を持って編集された映像の中の俺は、俺がずっとこうしてやりたかった気持ちをはつきりとさせてくれる。

「俺を殺してやりたい」

「ハモつちやったねえ。これまたぶつちやけ気持ち悪いねえ。

でも自分嫌いもここまでくると一周回って清々しいかな？太陽系一周して漸く清々しいって感じだけど。あとさっきも言ったけど君死んでるから殺すとか無理だから。ナンセンスナンセンス」

自分が嫌いだ。こんな自分を見たくなかった。自分を変えたかった。本当の意味で良いヤツになりたかった。

格好いいヤツになりたかった。
だから……

「職業を看護師に選んだんだよねえ。人のために役立つ自分になる
うとしたんだよねえ。まあそれも失敗しちゃったけど」

涙が出る。膝の上で握り締めていた手を開くことも出来ない。
嫌いな自分を表面だけでも肩書きだけでも良くしたかった。
なのに……

「自分の医療ミスで患者さんを死亡させちゃって、患者さんの遺族
に責められ懲戒免職。いよいよ内面どころか外面も取り繕うことも
出来なくなっちゃったねえ。挙げ句の果てに」

スクリーンの映像が変わる。

俺の最後の場面……

「茫然自失で歩いてたところを階段を踏み外して落ちてきた子供を
受け止めて転倒。頭の打ち所が悪くてぼっくり。
そして今は僕の前。
うーん、テンプレ乙」

もう涙も言葉も出ない……
いや言葉は出るか。

時間にして約三時間半の『偽りだらけの我が生涯』という無駄に凝
った映像を見終わり、座っていた丸椅子を基点に身体の向きを変え
る。

俺の1メートルほど後ろでソファーにどっかり座った男性と目が合
い絞り出すように声を掛ける。

「で、俺はなんで自分の人生の総集編を精神的苦痛アリアリで見せられたんですか？」

明かりが俺の背後のスクリーンだけなので逆光みたいになり、只でさえ陰鬱な俺の顔に更に陰がかかっている。

そして丁度スクリーンに流れる監督から脚本まで全員同じ名前のスタッフロールと同一人物の口に出す。

「その、えつと・・・神様？」

プロローグ（後書き）

自分で推敲しても全く修正できていない事実。
修正したら涙が出るほど元の原型が保てない。
おかしな点がありましたらご指摘お願い致します。

第一話・向こう側（前書き）

誤字や脱字、おかしいところがありましたらご指摘のほどお願いします。

第一話・向こう側

スクリーンにエンドマークが表示されてから無駄に広い室内が照明が灯る。

(と言っても照明器具らしきものは一切ない)

気がついたら丸椅子に座り、最悪な自分史を延々と見続けさせられていたので実際の室内の広さを確認出来たのは今が初めてなのだけでも。

広い……ではなかった。

スクリーンと俺と丸椅子、そしてソファーに座る神様(?)の他はただ延々と真つ白い空間が続いているだけ。

正直、真つ白な空間なんて表現はよく聞く(見る?)けれども、実際に自分がその場にいると発狂しそうになるくらいの異常空間だった。

約三時間半の苦行で磨耗した精神状態には堪える。

「自分の人生を苦行だなんて、君は『目覚めた人』にでもなりたいたいかな?だとしたら苦行が足りないねえ。あと二千年くらい」

ニヤニヤ笑いながら目の前の男性……もう神様でいいか、神様はさつきからずけずけと人の内面に入り込んでくる。

「あの、先程からもそうでしたけど……お、私の考えてることが解るのですか?」

というか解るのだろうな。この異常空間は落ち着かないものの、俺の順応性は案外高かったらしい。

会話をする取っ掛かりとして何となく聞いてみたが、これは居心地が悪い。

本音と建て前がバラバラな上、何気ない会話ですら頭の中でシミュレートしてから話す俺としてはコミュニケーションの相手としては最悪の相手だ。

「初対面のヒト（神）を最悪の相手と認識して会話するのは一社会人として如何なものかねえ」

・・・ほら最悪だ。しかもやはり心の中を読まれている。

普通、ニヤニヤした顔で裏も表も読まれている相手となんて会話なんてしたくもないだろう。

しかし妙な感じだ。

神様が笑っているのは解るのに、顔付きや体格、年齢や服装といったものを認識出来ない。

何となく男性っぽいと思うのだが、個人として特定出来ないような・・・自分の人物描写が苦手という弱点が露呈してしまった。いや背景描写とかその他諸々も苦手だけど。

「メタっぽい発言だねえ」という神様の発言も大概だとは思っ。

「まあ君の思う通りでグルグル渦巻く考え通りだよ。人間の一人や一兆人くらいの思考なんてちよちよいのちよいで読み取れるよ。君の『ちよちよいのちよいは古い』って思考もねえ」

つくづく嫌すぎる相手だ。帰りたい。逃げ出したい。

なるべく平静を保ちたいけど、思考を読まれ、胸の内を透かされるだけでいっぱいいっぱいなのに、異様な空間と対面の人物からくる圧迫感で身体が全く動かない。汗が止まらないし鼓動も早鐘のようにずっと鳴り響いている。さっき俺は意外と順応性が高いと言っただけど無理だ。

馴染めるものかこんなもの。

所謂転生系主人公の人達はこんな空気の中で神様と普通に会話して
るのか？

そんな真似が出来る時点で普通の人間じゃない。

完全に『あちら側』の人種だ。

「君も十分『こちら側』だと思うけどねえ。君の言葉を借りるなら
『大概』だよ君も。」

ふう、凡人の枠内に居たいのかな？憧れるけど怖いのかな？」

「私は・・・」

「『俺』でいいよ、いちいち切り替えてるのが見えて聞いてて気持ち
悪い」

「・・・俺は凡人で普通です。さっきの映像でも再認識しまし
たし。」

いや俺はたぶん普通よりも下です・・・貴方の言われる通り気持
ち悪いヤツです。感情と理性がちぐはぐで思考もバラバラです。適
当な言葉と態度と誤魔化して体面を作ってる人間です」

自分で言ってる嫌になる。何が嫌って、こつこつ風言葉並べて
自分を形作ると落ちて着いてくるのが。

精神の磨耗云々や汗や鼓動がどうとかも誤魔化せる。

自分を作って逃げ道を作ること慣れすぎて、作らないと俺は人
になることも出来ない。

映像の中の幼少期の自分すらそんな有り様だった。

我ながら気色悪い子供だと思った。

普通の家庭に生まれ普通の両親に育てられたのに、どこでこんな子
になったのやら。

育てられ方を間違っ て受け止めてる。

両親には先立つ不幸より「歪に育ってごめんなさい」と謝りたい。

「過小評価というより過微評価って感じだねえ」

神様から若干あきれが混ざった言葉が掛けられる。

存在自体は超然としてるのに人間臭さが感じられる。

大体この神様は俗っぽい。

会話の端々にアニメやスラングがちらほら現れし。

そのせいか、格上なのに敬う気持ちあまり出ない。

失礼にならないように言葉には気を遣うけれども。

「思考を読まれると解っていないながら、そんなことを考えている君は十分以上に失礼ではないのかねえ」

またふうと息をつかれる。

「い、いえ・・・その決して貴方を悪く思ってるわけではなく、あ、あの・・・どちらかと言えばお立場を考えるに大変気安く親しみやすい方だ・・・」

しどろもどろになりながら必死に言葉を繋ぐ。手振りを加え姿勢も前に出してしまう。

生前は友人（自分の矮小さを知った今となっては自分から友人と言える立場じゃないが）から「冷静で真面目で落ち着いたヤツ」という評価を貰っていたのだが見る影もない。

またしても自分を象るものが上っ張りだけだったと再認識。

死んでからの俺、生前よりも駄目だ。

またもや駄目思考に沈んでいると、神様が笑っていた。

さっきまでのニヤニヤ笑いと違い、楽しいものを見て笑うようにしている。

クスクスと言えはいいのか？

(どうでもいいけれども、その人をはつきり認識出来ないのに感情や表情が理解出来るのはどういった理屈だろうか)

怪訝そうな俺に手を振って笑いながら語りかけてくる。

「いやあ、楽しいねえ。君のキャラが壊れ、また取り繕ったあとですぐ崩れたり。

順応出来ない君はどこにいったのかな？

僕に畏怖する君は？

冷静が売りな君は？

主人公達と違い神様(僕)と会話なんて出来ない普通の人間の君はどこかな？

いい加減に気付こうねえ？

たかだか性格に難があるだけのヤツが神なんて存在会えるわけないよねえ？

言ったよねえ？過微評価だつて？

神に会って自分の形だけを取り繕う人間が。

ただの人間だと？

はつきりと言わなきゃ解らない？

自分の逃げ道を作る暇があるくらいだから解ってるでしょ？

でもいいよ。言っただけよ。

羨ましくて憧れて、でも怖くて受け入れられなかった現実を。

君は最初っから『主人公』だよ」

第一話・向こう側（後書き）

話が進まない。

何時まで喋ってんだか……

第二話・転生系主人公（前書き）

誤字や脱字、おかしい点がありましたらご指摘のほどお願いします。

第二話：転生系主人公

「俺が『主人公』？」

訳が解らない。

今居る自分の立ち位置から鑑みればそう見えなくはない。

『事故に遭い死亡』

『神様と出会い会話する』

『神様から特別（主人公）扱い』

転生系主人公ものだと言われたらよくあるパターンだと納得出来る。
対象が俺でなければ……

「なんだつたら『勘違い系主人公』でもいいよ？
自分は大した人間じゃないと思ってるのに何故か周囲の人達からは
凄いヤツだと思われたりねえ」

クスクス笑いからまたニヤニヤ笑いに戻った神様が、ソファーにも
たれかかり足を組み替えている。
だから動作が解るのに体格も服装も解らないなんておかしいだろう。
いっぱいいっぱい状況が多すぎる。

考えてみたら自分が死んでいるという状態に一切疑問を挟んでない。
もう今更過ぎて蒸し返すネタじゃないんだと無理矢理納得する。
クツションも敷いてない硬い丸椅子に三時間以上座って、いい加減
尻が痛いことも今更だ。

大体死んでいるのに痛いやら心臓の鼓動やらもう滅茶苦茶じゃない

か。

展開に流されて忘れられてるかもしれないけれども、生前は俺は看護師だったんだ。

新米だったけど。

こんな現代医療に真っ向から喧嘩を売る状態になっっているのに「死んでいるのに生きているんだ俺」と思う自分が嫌だ。

自分を着飾る為になった看護師とはいえ死ぬほど勉強してきたのは事実。

何日も徹夜もしたし、課題やレポート、看護記録なんかを書きまくって二十歳そこで肩こりに悩まされ整体通いまでしていた。

苦労してきた生前のことを自分自身でなかったことにしていた訳だ。

看護師を目指した動機も不純で利己的。

働いていた時も患者を見守りながら看護をしながら、自分をよく見せるポーズにしていた。

最低だよ。最悪過ぎるだろう。

何よりも最悪最低なのが、『人一人殺しておきながら、のうのうと事故死してその過失をリセットしている自分』に気付いたからだ。

さっきの自分の映像を見てまだ一時間もたっていない。

死んだから終わったことにしている自分に吐き気がする。

何もない真っ白な空間？

異常だよ、ああ異常異常！

時計もないのになんで上映時間がわかった？

時間の経過が正確に解るのは何故だ？

答えは『よく解らないけど何故か解る』だ！！

ご都合主義もここに極まってる。

なかったことにしていた罪悪感に頭を抱え込んでいた俺を、一言も話さずただ眺めている神様。

自己嫌悪で狂いそうで懺悔する人の気持ちを理解する。

「赦されるつもりも赦されれないつもりもない人間が懺悔してもねえ」

「君はほっとくとすぐ自己嫌悪と自己弁護に走るんだねえ」と辛辣な言葉を頭上から掛けられる。

神様はいつの間にか立ち上がって俺の前にいたらしい。

「僕から言われるまで『転生』なんて口にしなかったのは、人を死なせておいて自分が助かる逃げ道がある可能性への罪悪感と期待がらかな？」

唇を噛み締めながら降りかかる言葉を黙って聞く。

「最低な看護師さんだもんねえ。まあ僕に言わせてもらえば、お金貰ってその分しっかり働いていたんだから良く見せる為のポーズでも問題ないと思うけど」

「格好いいポーズってね」と神様は笑いながら話す。

「魔法陣グルグルまで知ってるんですか・・・貴方普段どんな生活を送っているんですか・・・」

神様と漫画の趣味が合いそうだ。

絶賛自己嫌悪中（神様の言うように自己弁護中でもある）であつても会話の小ネタに反応してしまう。

本当に俺はどうなりたいんだろう？

漫画や小説の中の主人公。

真っ直ぐでひたむきで格好良くて。

迷っても悩んでも最後には立ち上がる。

嘘ばかりで逃げ出してばかりの自分とは大違いだ。

死んでも逃げて出そうとする自分とは本当に……

「格好いいヤツになりたいなあ……」

「人生二回目の本音だねえ」

神様が嬉しそうに笑っている。

自分でも確かに本音を言ったと思う。でも二回目？

「看護師を目指す時も言ったよねえ。

『格好いいヤツ。いいヤツになりたい』

結果は伴わなかったし目指した目標も自分の為の手段に成り下がった。でもあの時の君は二十数年間の人生で一度だけ変えようとしたんだよ。

取り返しのつかない失敗はしたけど、そこまでの努力だけは本物だよ。

神様である僕が保証してあげる」

畜生。赦されるつもりも赦さないつもりもなかったのに……

生前から死んでからまで、今漸く少しだけ救われた気持ちになっってしまった。

今更が多すぎるけど。

二十数年間も生きて死んで。

俺は初めて素直な感情を表出して泣いた。

「で、君の転生先なんだけどねえ」

大の大人がわんわん泣いた数十分後。

神様は漸く本題に入ったとばかりに説明を始めた。

俺はというと所在なさ気に例の硬い丸椅子に座り直している。

気恥ずかしさがメーターを振り切っているが流石に今回は逃げ出せない。

泣き止んでしまつと冷静になつてしまい自分の醜態を思い出し、なかなか顔を上げられずどうしようかまたもや逃げ道や誤魔化し方を考えていたら「知らないのかい？神様からは逃げられないんだよ」とご親切なことに逃げ道に回り込まれた。

絞り出すように「それは大魔王の台詞です」と目と顔を赤くしながら呟き神様の前に座った。

わざわざ冗談を交えて俺が起き上がりやすいように配慮してくれるのが嬉しかった。

でも神様のニヤニヤ笑いを見て、ただその台詞を言いたかつただけだとわかり嬉しさが引つ込んだ。

「候補は3つ。」

ひとつめは中世なファンタジーな世界。剣と魔法を武器にモンスター

「や魔王を倒すロープレ的な展開」

王道ってやつかな。

俺の考えを読んでか神様はうんうんと頷く。

「ふたつめは現代風ファンタジー。現代社会を基盤としつつ裏の世界には異能と異形があったり色々ね」

超能力バトルとか？

現代の闇に潜む怪異との戦いみたいなものも含むのだろう。

これまた神様はうんうんと頷く。

神様という会話という基本的なコミュニケーションツールが退化しそうだ。

「最後は最近の転生先でも流行りかな？漫画やアニメの世界に入っちゃうヤツね」

・・・これまた王道テンプレな。

つまり先の二つだと全く知らない世界行くわけだ。

行った先では何が起こるかわからない。

自分の力で切り開く正に主人公となる・・・のかもしれない世界。

この解釈であっているのだろう。神様は両腕で頭の上に丸を作っている。

シールドだ。

最初の頃の威圧感はどこにいったのだろう。

まあ神様は終始ニヤニヤしていただけだし俺が勝手に畏怖していたのかもしれない。

それが単に慣れただけか。

俺もいい加減に力が抜けたように思うし、本音と感情を晒して開き直ったのだろう。

しかし本質が変わった訳ではないので、自己に埋没すればまたドロドロした思考に捕まってしまう。

生まれてからずっと一緒に育ってきたようなものだし、早々割り切れたりはいらないし、切り捨てることも出来ないだろう。

というかこういう思考状態がドロドロに入りこむ原因だ。

考えたら沈むし考えなければ先ず動けない。

つくづく・つくづく自分が嫌になる。

とか言ってる内にまた沈みかけており、神様がポカッと頭を叩いてくれたおかげで頭と思考が浮き上がる。

有り難いけど擬音の割には痛烈な一撃だった。

「さて君はどれにするか決めたかな？

なんて説明した手前で言ったけど、正直君が選ぶ選択肢は解ってるんだけどねえ」

神様のニヤニヤ笑いももうテンプレだ。

言う前から答えが解られているのは少ししゃくだが、それこそ今更言うことじゃない。

大体俺の答えはそれこそ説明される前から決まっている。

神様の目（おおよその目の位置）を見ながら俺の選択した答えを告げる。

「俺は主人公だと神様が言われましたけど、俺は主人公じゃなくいいんです。

俺は自分が憧れた主人公達をその側で見たい。

その強さや信念、生き様を物語の中で生きる姿を見て感じたい」

主人公の仲間や協力者でなくてもいい。

傍観者を気取るつもりはないけど、共に生きる世界で、世界を守り仲間を守る主人公達を見たいんだ。

「うんうん。了解了解。どの道、三番を選べばひとつめもふたつめも一緒だからねえ。要は君の立ち位置が変わるくらいだからねえ」

神様は「まあ、立ち位置がどうとかなんて気にしても無意味だけど」と妙に引つかかることを呟いていたが、それを追求しようとしても「気にしない気にしない」と適当にあしらわれた。適当な誤魔化しは俺のキャラなんだけど。

「じゃあ後はどの世界するかなんだけど、希望はあるかな？」

考えてなかった……

主人公のいる世界云々とかは考えていたけれども、どの世界に行くかは全くノープランだった。

行ってみたい世界、あってみたいキャラクターはいっぱいあるけれども、みんなみんなみな叶えてはくれまい。

ここでまた頭を抱える事態に陥るとは。

肝心な時にはいつも俺はこうだ。本当にどうしようもない男だ。くそっ！鬱だ死のう！

「しょうもないところで沈むねえ君は」

また頭をボカって叩かれた。さっきよりも痛かった。擬音がそれを現している。

「本当はゆっくり決めて貰っても構わないんだけどねえ。

まだ決めなきゃいけないこともあるし、今回は僕が君にぴったりの世界を選ばせ貰おうかな」

俺は優柔不断なところがあるので、神様のオススメを選んで貰える

のは有り難い提案である。

あれこれ考えたい気持ちもあるので不満がない訳ではないが、それこそ思考の負のスパイラルにまた入り込む可能性がある以上この方が無難だ。

苦しい時は神様頼みだ。本神が目の前にいることだし。

「神的な本音を言えば、いちいち沈んでる君をサルベージするのも面倒だしねえ」

俺を前にしてぶっっちゃけ過ぎだと思う。

「さっきみたいにネコ型ロボットの歌で遊びながら選ばれるのもみていて気持ち悪いし」

そこもぶっっちゃけ過ぎだと思う！

そしてその件に関してはスルーして頂きたかった！！

結局神様にお任せした形になったが、行き先については「ついてからのお楽しみ」らしい。

不満はなくても不安はそれなりにある。
知っている世界だといいのだけでも。

第二話：転生系主人公（後書き）

転生前からウジウジジメジメ回りくどくて鬱陶しい主人公。

おかげで話が進まないっいたらありやしない。

神様の読心設定で主人公が喋らなくてもいい分、余計に思考に沈むようになってしまった気がする。

ダウン系主人公なんて何がいいんだ……

第三話：規格外の能力（前書き）

誤字脱字やおかしなところがありましたらご指摘のほどよろしくお願ひします。

今回から文章量が少しずつ多くなっていく予定です。

しかしどうしてこうなった。

第三話：規格外の能力

「さてお待ちかねえ。

当事者も観客も誰もが一度と言わず二度も三度も夢想し期待する展開だよ。

君はどんな能力を望むのかな？」

「そういう流れになるのかなとは思ってましたけど、本当にあるんですね。転生前のご都合イベント」

正直期待していた。

自分がもし物語に関わるならこんな力が欲しい。

あんな武器を使ってみたい。

最強。無双。チート。

ちょっと痛い妄想なんて誰だってしたことあるだろう。

俺だって中学生くらいによく発症する病と十年以上付き合ってきたんだ。

いい年して胸が躍ったっていいじゃないか。

膝の上で握り締めている手に力が入る。

口元も緩んでいる気がする。

何の因果か自分だけが得られた幸運を嬉しくないわけがない。

でも……

「あの神様、一つ確認したいことがあるのですがお聞きしても宜しいですか？」

「『どうして俺なんかここまでしてくれるんですか？』かな？」

神様が俺の疑問を、素直に喜べない心情を察してくれる。

俺は単純に喜んだり浮かれたりしてはいけない。

生前の自分は決して真つ当な人物だとは言えない。

それに事故とはいえ人を死なせている。

なのに自分だけが降つて湧いた幸運をただ享受することは出来ない。先ほどより強く握っていた手を一度開いてからまた握る。

じんじんと手のひらに痺れとも痛みとも取れる感覚がある。

この程度の痛みで贖罪を気取るつもりはないけれども、少しでも自分に何らかの罰を与えていないと心が耐えられない。

自分が反省している姿を作っていないと好意も施しも受けられそうにない。

「面倒臭い人だねえ君は。『ヤッタ！ヤッタ！』と喜んでいればいいのに。」

話をちゃっちゃと進めたい僕の気持ちも察してよ。」

嘆息する神様に申し訳無さがまた一つ追加される。

思わず「うつつ」と呻き声を上げるけれども、神様の方は俺が気になっっていることについて答えてくれるらしい。

ふうと息を吐いてから口を語り始めた。

「この際だから君の疑問や困惑、良心の呵責なんかを纏めて解決しちゃう。」

先ず一つ。君が死んで僕の前に来たのは偶然でも幸運でもましてや僕のお情けでもない。

最初から決まっていた決定事項だよ。

僕は言ったよな？普通じゃないから君は此処にいるって。君は生前過ごしてきた世界にとってイレギュラーなのさ。」

イレギュラー？俺が？なんで？

想像もしてなかった答えに反射的に身体が浮き、その反動で丸椅子がガタツと音を立てて倒れる。

神様は俺に手を翳して立ち上がるのを制する。

丸椅子を直して座り直すが流石に落ち着いてはいられない。

「イレギュラーなんだからそうとしか言えないねえ。

ああこれは別に君が死ぬ間に助けた子供のことは関係ないよ。

あの子は君と違って普通の人間。完全無欠の一般人だよ。

それこそ君が助けず死んでいたって全く世界には影響はない。

後世にも響かない」

「助けてくれた君が死んだことでトラウマなり罪悪感なりは生まれ
たかもねえ」と意地悪く続ける。

あの子を俺の現状に対する理由にするつもりはなかったけど、死ん
でも構わないように言われると不快に思う。

助けたことがあの子にとつて悪いように聞こえるから尚更だ。

そんな俺の様子を見て肩をすくめる神様。

眉間に皺が寄り睨むように前を見るが全く気にされていない。

「そんな顔されてもねえ。僕にとつてただの子供の一人や千兆人死
のうがどうなるうが本当にどうでもいいんだよ。

人間の感覚で神（僕）をはからないで欲しいな。

別に僕からすれば人間なんて虫けらとか塵芥だなんて思ってないし
ねえ。

人間は人間。

虫けらは虫けら。

しっかり線引きして混同はしないよ。

それに君の死云々があの子供に影響与えたからってなんだい？

トラウマになるかもしれないけど、それで塞ぎ込むのも助かった命
に報いるのもあの子次第だよ。

助けた責任を持ち出すのは格好いいかもしれないけど、死んでまで
気にすることかい？

なんだつたらあの子の夢枕に立って『助かってくれて有難う！俺のことは気にせず楽しく生きてくれ！』って言いに行く？それで満足するのは君であって君だけだよ。

利己的で自分本位な人間を気取るなら、助けた結果だけに満足して後のことなんか省みないようにねえ。

善行も偽善も悪行も偽悪もやるなら徹底的にやってねえ。

中途半端は君のキャラクターだけどやられた方は困っちゃうよ」

……一気に虚仮卸された。

善いことをして説教されるなんて理不尽過ぎると思うけど、呆氣にとられて眉間どころか唇や手や身体中から力が抜けている。

だらんと四肢を垂らし口を半開きにしている俺はさぞかし間抜けに見えることだろう。

反論する気も失せた。

俺の思考と心情を読み取り、わざわざいらぬ説教をさせられた神様も「あーあー」と喉を押さえながら発声し仕切り直している。

説明を脱線された意趣返しも含めた説教だったのだろう。

神様の癖に器量が小さい。

とは言え俺の思考にいちいち付き合ってくれるのだから神ゴトがいいのかもしれない。

他人の思考を読めるなんて便利に思えたけれども、俺を相手に行っている姿を見るとコミュニケーションツールとしては不便極まりないな。

面倒臭いと言いながら面倒見がいいのは神様の性格だろうか。
難儀な神様だ。

「あーあー、うん。よし話を戻すよ。

君はイレギュラーだって言ったけど、その理由を説明したげる。君は君が居た世界にとって規格外なんだよ。

笑っちゃうくらいに規格外。

その気になれば現実世界に君臨する魔王になれたかもねえ。

ファンタジー
ねえ？規格外でしょ？

幸か不幸か、君が中途半端な卑屈人間で外見を飾る程度にしか能力を發揮してないから問題はなかったけどねえ。

死んだ後の魂だけでも規格外だったから、肉体を失い制御不能の無意識状態で力を發揮して世界に影響を与えようとするんだもん。

何が起きたか教えて欲しい？ああ怖がらなくても大丈夫。被害は全くないよ。僕がすぐに拾いに行ったから。

ちよびつと洩れた力のせいでみんなびつくりしただろうねえ。

一瞬だけ地震が起きたんだよ。揺れたような気がただけだろうねえ。安心した？

でもね、もしそのままにしてたら……」

生まれてきてすみません。

死んでしまってすみません。

日本の皆さんごめんなさい。

そして生きとし生けるもの全てにごめんなさい。

どうやら俺は真正銘の規格外イレギュラーだったようです。

なんたって……

「もしそのままにしてたら、日本沈没していたからねえ」

全く笑えないよ神様。

「まあそんな君だから僕の前に居るわけなんだよ。わかったかな？」

丸々全て信じたわけではなかったけど。

最初に見せられた最悪な自分史を初め、この不思議空間での神様との不可解コミュニケーションを通して、もう大抵の異常なことに慣れてしまった。

これだけ異常なことが連続して起きているんだ。転生系主人公に自分なるくらいなんだ。

元々自分が異常だったことくらい受け入れるさ。

もうどうにでもしやがれた。

「諦観しちゃってるねえ。気持ちは解るつもりはないけど解ってあげるよ」

神様の軽口にも返す気力はない。

なんかもう罪悪感とか転生することへの期待と不安とかもどっか行ってしまった。

今の俺は虚脱感に抗うことなく丸椅子から下りて地べたに胡座をかき、動物園のパンダ宜しく丸椅子を左手でゴロゴロ転がしながら遊んでいる。

なんだか久しぶりの逃避だ。常に自分を取り巻く世界から逃げながら生活していたあの頃が懐かしい。

「そのままでもいいから話を再開するよ？」

しかし死んだら日本沈没ってどんな存在だよ。地球破壊爆弾か俺は。

「つまり君が転生するっていうのは必要な処置なんだよねえ。世界を守る為みたいなの。これだけ聞いたらなんかヒーローみたいだよな。え。スーパーヒーロー伝説」

しかしレギュラーか……

何というか、元々俺は世界にとって規格の外だったんだなあ。

いらぬ子じゃなくていらぬ子なら困る子。

世界規模で家無き子が……

「だから君の異常な力がある程度容認される世界に行く必要があるんだよねえ。」

その意味では所謂王道転生物の異世界や超常現象満載な物語の世界はうってつけなんだよ。異常が正常な世界だと受け入れる世界の懐も大きいからねえ」

元々自分が不必要だと思えば、かつての世界への未練もなくなると言うものだ。

それでもこんな自分でも愛してくれた人達が居た世界から完全に去るのだから郷愁の念は消え去らない。

生前は実家に殆ど帰らなかつたけど、二度と帰れないと解ると急にホームシックになる。

母さんの手料理が食べたい。

父さんとお酒が飲みたい。

妹と対戦ゲームをしながら喧嘩したい。

飼い犬（名前ワツフル雑種ハオメス）と散歩に行きたい。

思いっきり未練たらたらじゃないか。

「まあ大体の君の疑問にも答えだし、半端な呵責もどうでもよくな

ったことだし、最初の最初に戻ろうかな？

転生先に必要な能力を幾つか選んで、君の能力を制限しないとねえ」

あー、なんか座っているのも疲れた。寝転がってしまおう。

床が冷たく気持ちいいな。手でさすっても床の材質なんて解らないし何で出来ているんだろう。神様鉱物だろうか？

それにしても真っ白いと病院のリノウムを思い出す。

そういえば俺が急に辞めることになって夜勤のシフトの変更とか大変だったろうな。

つくづく迷惑かけっぱなしでいなくなるんだな俺は。

・・・そろそろ起きるか。いくら虚脱状態だったとは言え神様のまえで寝転がるなんて不遜極まる。

失礼にならないようにとか考えてた癖に随分な醜態を晒してしまった。

丸椅子は転がし過ぎてちょっと離れたところにある。

立ち上がって取りに行くのも億劫だし、反省の意を含め床に正座しよう。

神様をお待たせするのも申し訳ないし。

自分の能力も決めないといけないな。

最強もチートも俺の性格には合わないし、可もなく不可もないバランスのとれた能力にしよう。

すでにいくつか候補はあるし。

あとはそれに合わせて自分の能力を制限して・・・

えっ？

「思考の怠惰の海からお帰り。能力の候補もあるようだし、ちょっと決めてちゃっつちやと制限しようねえ」

「ちよっ！ちよちよちよつと待って下さいっ！！俺能力を貰えるんじゃないんですか！？しかも制限って！？」

俺の存在は規格外で魂だか何だかが爆弾らしいのだけれども、あくまで俺の身体や知識は一般人のそれでしかない。寧ろ運動音痴で体力もあまりない方だ。

こんな状態から更に制限がかかって超常世界に転生なんて無理ゲー過ぎる。

第二の人生が始まる前からバッドエンドだ。

制限プレイをするくらいなら最強チートの方がいい。

ものの数分で正座を解き神様に詰め寄った。

生まれ変わる前から命の危機だから仕方がないだろう。

「うーん、中途半端が君のキャラだっけ解ってはいるけども、理解力の中途半端さは結構面倒だねえ。

ま、誤解しやすい発言をした僕も悪いか。メンゴメンゴ。

もういい加減能力の話をしたいし巻いて説明するよ。巻き巻きで」

嘲りと心が籠もってない謝罪を言い、さも面倒だと言わんばかりに神様は右手をヒラヒラと降った。

瞬間、前傾気味に詰め寄っていた俺の身体は土台に立てられた細い鉄の棒を弾いた時のようにビーンと微かに震えて直立不動の状態になった。

指先一つ、口先すら動かない。

読心以外では初めてみた異能力だけど。

実際すごい力だけれども。

こうまでするくらい俺の対応は面倒なのか。

扱いが雑過ぎる。

「言いたいことは僕が言いたいことを言ってから言っただけだ。」

まあ聞き終わったら反論する気もないだろうし僕もまともに聞く気はないけど。

「まずは制限についてだけど、さっきも言ったように君はイレギュラーだよね。」

それは君の居た世界にとっても、今から転生する世界でも一緒だ。だってあちらは元々完成している世界だ。

居るはずのない登場人物はまさしくイレギュラーだろう？

君が行っても問題ないのは確かだけでも、それは空いた部屋に居候するようなものなんだよ。

要は『来てもいいけど迷惑かけんなよ？』ってこと。

といてもその辺は流石は物語。最初はその世界がちよこつと嫌がらせしてくるかもしれないけど、何年かすれば落ち着いてくるから世界も愛着湧いて『遠慮すんなよ。お前だって俺の家族さ』みたいな感じになるから。物語の世界はあっさり危機に陥る癖にいざという時は懐が大きくデンと構えてくれちゃうからねえ。

話を戻すねえ。

居候先に行くには沢山荷物を持っていくと邪魔になるし迷惑になっちゃうよねえ？

君の場合はその溢れんばかりの無駄パワーが荷物なんだよ。

だから必要最低限の荷物を置いていく（制限）必要があるのさ。

解ったかな？

まあ確かに今まで平凡と言える日常を送ってきた君だから、使ったことのない能力を制限なんて言われたら焦るよねえ。

僕も配慮が足りないねえ。ごめんちゃい。

でもね、力を解放した君はとんでも野郎なんだよ？

今の君を1とするとあちらの世界じゃ100万なんてことなるんだよ。

あちらの世界の一般人も基本は君と変わらない普通の人。

あちらでは一万超えたら伝説クラス化け物だつて言ったら、僕の言ってる意味も理解出来てくるよねえ？

普通の居候先に宮殿持つて行くわけにはいかないよねえ。

回りくどいかな？ 気付いたけど僕も大概面倒なタイプだねえ。人のこと言えないね。ゴミンゴミン。

という訳で、君の力を最低でも百分の一まで制限するよ。

勿論ちゃんと能力は解放したげるから。

それじゃ・・うん終わり。解放して制限したよ。

その制限は僕しか解けないから実質永遠に解けない。

身体が動かないまだ実感ないだろうけど拘束が解けたら試してみたらいいよ。

自分にドン引きするから。

あとは使用する能力や身体能力について教えてあげないとねえ。

身体は基本的に頑丈、俊敏、怪力、反射や感覚機能なんかも超人扱いされるかな？

大丈夫。あちらの世界も大概超人だらけだから。

フルパワーでも出さない限りは大丈夫。

ん？フルパワーと通常と境界？

うーん・・あー・・面倒臭い。もうアレだ。界王拳で行こう。

フルパワーが界王拳20倍ね。上限だけ分かればいいでしょ？ あちらには気念があるから丁度いいや。いいじゃない。男の子の夢だよねえドラゴンボールは。

かめはめ波は使いたかったら自分で練習してねえ。

という訳で使用能力の一つは界王拳で決まり！

あーちよつと喉乾いたかな？ ずつと喋り通しだからねえ。

まあ僕は神様だから喉乾かないんですけど。ヨホヨホ！

えつと後は魔法関係かな？ あちらには魔法があるからねえ。

魔法使いになれるよ？ やったねえ！ でも大っぴらには使えないからコッソリ使つてねえ？

あちらの魔法の知識とか技術いる？使ってみたい魔法なんかがあるならそれでもいいよ？

でも君はあまりゲームとかの魔法知らないんだねえ。小難しい詠唱とか大変そうだしねえ。

アレ？でも君何気に十周くらいしてるゲームあるねえ？

『ファイナルファンタジータクティクス』か。いいねえ。僕もあのゲームは大好きだよ。

ただのファイナルファンタジーと違って詠唱文もあるじゃない。

やっぱり魔法詠唱文は人類の夢だよねえ。

うん！魔法はそれで行こうか。

黒魔法、白魔法、時魔法、陰陽術。あと刀の引き出すもつけとこう。勿論刀もセットであげるよ。サービスじゃないよ？刀を生み出すのもまた君の力を使ったからねえ。

刀は痛い男子の夢だからねえ。ちゅーにちゅーに。

ついでに聖剣技と暗剣技もつけておくねえ。拳術もあれば安心ですよ？

ん？心外だねえ、勝手に決めてないでしょ？

ちゃんと君の思いのままに選んでるんだから。

最強とかチートとか嫌いな癖に随分とまあいっぱい考えてたねえ。

プププ。

『型月』を選ばない辺りに拘りかプライドがあるのかな？

別に怒っちゃいないよ？『さつきから笑い方とかが古臭いし鬱陶しい』って思ってることも気にしてないからねえ？

大体こんなものかな？あと何かいるのかな？

・・・うんうん。

流石に過去やら失敗を引き摺る男は違うねえ。

そっか本当は最初にコレを選ぶつもりだったんだ。

偽善的でいいんじゃないかな？

馬鹿にしてるわけじゃないよ？

今度は間違わないようにしたいもんねえ？

何事も正しい知識と正確な技術、そしてそれを扱う強い意志だからねえ。

君の場合は最後のが足りないけど、そこまでは僕はしらない。自分で間違わないように使えるようにねえ。

ふうー終わった終わった。お疲れ様、僕。

君の為にこんなに頑張っちゃって好感度が鯉のぼりだねえ。

鯉が竜に変わるくらいののぼり具合だよ。

もうちょっとしたら身体の拘束が解けるから色々試してごらん？

僕は君の転生する世界を調整してくるから。

じゃあまた後でねえ」

俺が気が付いた時には真っ白な空間に独りきりだった……

第三話：規格外の能力（後書き）

ずっと神様のターンだぜっ！！

主人公はラカンさん方式でみると最強チートもいいところですが、力を扱う技術や知識がからきしです。子供先生と同じく経験を積んで強さを不動なものになるはずです。多分。

神様が扱いやすいのでつついっつい甘えてしまいます。いい加減転生させたいと思います。

ペットの犬の名前が主人公より先に登場する有り様。未だに名前も容姿さえ描写されないし。主人公エ・・・

第四話：人生再出発（前書き）

誤字脱字、おかしい点がありましたらご指摘のほどよろしくお願
い
します。

文量は少な目にまとめました。

適当な字数はどれくらいなのでしょう？

漸く此処まで・・・

第四話：人生再出発

神様の一方的なようで俺の意向や主張なんかも適度に加味された協議の末に得た能力は思いの外・

「は、恥ずかしいな・・詠唱や技の名前を口にするの」

二十代半ばの成人男性にはキツかった。

神様に放置されてから約十分後。

本来なら此処に来た直後に思うであろう感想を述べた後、とりあえず自分の能力について確認をする。

神様曰わく、溢れんばかりのパワーやら気やら魔力やらがあるらしいのだが、漫画やアニメのように身体からオーラが浮かぶことも無ければちよつと力んでみても身体がプルプル震えるだけで何も起こらなかった。

真っ白な空間で中腰でよくわからない俄か拳法の構えをした成人男性が、数分間プルプル震えながら力む姿はさぞかしシユールだっただろう。

気や魔力は後々練習するとして、身体能力がどれだけ向上したのか

を調べることに切り替える。

先ず腕力。何か持ち上げてみようと思ひ神様が座っていたソファ―に手をかける。

真つ白い空間に無駄な存在感をかもす、黒革張りの大人三人はゆったりと座れる高そうなソファ―。

横幅があるため、力自慢の人でもバランスが取りづらく浮かせるくらいが精々だろう。

前の俺なら引き摺るだけで精一杯だ。

先ほどの気や魔力の失敗もあり、何も起こらなくても恥ずかしくないように背もたれ側から底の部分に手を入れ「軽く」力を入れ持ち上げてみる。

「よっ・・・と?」

手のひらや腕にはそれなりに重みがある物を抱えている感覚がある。しかし自分が腕に込めている力は空のダンボールを持ち上げている程度しかない。

恐る恐る右手をソファ―の重心に当たるような場所へ滑らせ左手をゆっくり離す。

まあつまり、右手一本で成人男性では抱えられないソファ―を持ち上げているわけで・・・

そこからなんとなく指を一本ずつ浮かせていき・・・

最終的には人差し指だけで、イタリアンのシェフがピザ生地を浮かせ回すようにソファ―をクルクル回転させいる俺がいた。

「俺！自分が怖いっ！！」

「何だか自分に秘められた力に戸惑い、恐怖する主人公みたいな台詞だねえ」

いや、もう有り得ないくらいの身体能力だわ。

あの後も神様が戻ってくるまで自分の身体能力を確認してみたのだが、もう異常事態のオンパレードだった。

指先でソファアを回していたが、バランスが崩れ床に落としてしまった。

その時に「ズドン」と決して軽くない物体が落ちた音がするものだから流石に顔が引きつった。

腕力が上昇しているのだから脚力も同じように上昇しているわけで、爪先をソファアの下に引っかけたリフティング感覚で蹴り上げたら、10メートルくらい上までソファアは吹き飛び落下して大破。

壊れたソファアの残骸から握り拳大の破片を取り出し、遠く投げたソレを走って追いかけてたら、落下する前に悠々とキャッチ。

今度は思いつきり遠くへ投げてみたら弾丸のような速さで飛んでいき、またソレが数キロ先まで飛んでいつているのにすっかり視認出来ている事実。今度は顔が引きつるのではなく強張った。

意識しても表情筋が動かないこともあるのだと学んだ。

そして冒頭的一幕。

どうせ一人しかいないのだと開き直って思いつきり技名を叫んでみた結果……

「『かああいいおううけええんん！！』ってやってみたんだねえ」

「お願いだからっ言わないで下さいっ!!」

今度はしつかり発動し、強化された脚力で蹴っても傷付かなかった床が発動した瞬間ひび割れた。

更にはよくみたら薄赤い陽炎みたいなものが身体を覆っていた。

この状態で何かを試す勇氣はなかった……

「いくらなんでもびっくり超人過ぎますよっ!?!?こんな身体能力のキャラクター、ドラゴンボールの世界でしか適応出来ませんって!?!?よくある原作破壊なんてレベルじゃなくて漫画の世界そのものを破壊しちゃっしょっ!?!?!?」

転生主人公が「原作のキャラの百倍強く!」とか言ってたのを見たことあるけど、お前は馬鹿かと丸一日かけて説教してやりたい。

漫画のキャラクターを常識の枠組みで測っても無意味だとは解る。

だけでも、こんな不条理な人間が近くに居て巻き込まれたら絶対死人が出る。

今の俺が本気で街中を疾走したら戦車がF1並みのスピードで走り回ると変わらない。

これで本当に制限されているのだろうか……

「それは勿論。今の君は本来秘めていた力の百分の一以下。確実に弱っちくなっているよ。地球に来たばかりの頃のベジータより少し上程度だねえ」

つまり一人で地球を滅ぼせるくらいってことじゃないか。

日本沈没なんて片手間で出来そうだ。

地べたに座り頭を抱える。

死んでから俺は何回頭を抱えたんだろう。

最強チートはいらないって言ったじゃないか・

「力に自惚れられるのも頂けないけど、力で鬱病になられるのも困るねえ。

まあ心配しなくてもその内馴染んで上手くコントロール出来るはずだよ」

楽しそうに笑いをかみ殺しながら話す神様。

どうでもいいけど貴方ニヤニヤ笑いが標準装備じゃなかったのだからか？

長々と独り語りしていた時もそうだったけど、この神様もキャラがブレてるように思える。

人としての軸がうどんかなんかで出来てそんな俺が言うのも何だけど。

「ところで、僕が戻ってきたということは転生の準備が終わったってことなんだよねえ。もういつでも行けるけど君は準備出来た？」

そういえば神様は何かしらの調整に行っていたのだったか。

正直、心の準備も身体の準備も万全とは言い難い。

魔法に至っては試してすらいない。

かと言って、時間をかけてもこれ以上どうにかなるとも思えない。

・なるようにしかなるまい。

立ち上がってズボンのお尻を手で払って神様の向かい合わせになる位置につく。

「不安はありますがけど、此処に居るのも落ち着かないし・・転生お願ひします」

真っ白な空間に長居するのは俺の薄弱な精神に良くない。

神様にも悪い・・・「そうだねえ。ソファーも壊されちゃったし」からね・・・

弁償しろとか言わないよな。死んでるから財布とかないよ俺。

「転生しちゃうと僕と会えないからねえ。聞きたいことがあるなら、これが本当に本当の最後だよ」

弁償は大丈夫かな。

どうせ考えが読まれるのだから心の中で謝っておく。

あと聞きたいことが・・・

「転生先は日本とか外国と違って分かります？最悪でも言葉くらいは通じて欲しいんで・・・

あと俺の他にも転生してくる人っていますか？」

「君の転生先は日本だよ。現代の日本語で問題なく通じるよ。

あと君の行く世界は君一人受け入れるだけでキャパがいっぱいだからねえ。これ以上の来客はお断りだつてさ」

少しホツとした。神様相手だと言葉がなくてもコミュニケーションがとれるから安心していただけれど、生まれ変わった先で言葉が通じないのはかなり困るだろうから。

それに他の転生者がいないのも安心要因だ。

俺がしたいことは俺なんかとは違う格好いい原作主人公達の活躍を見たいだけ。

原作に介入したり破壊したりするのは御免だし、他の転生者に滅茶苦茶にされるのは困る。

かといって敵対なんかしたくないし、平和的に無難に過ごせるなら万々歳だ。

「有難う御座います。もう確認することありません。何だか色々ご迷惑かけてしまい申し訳ありません。これからは自分の力で頑張っていきます」

「・・・うん。どうぞ致しまして。今の言葉も本心からだねえ。自分で言うのも何だけど、神様なんて胡散臭い存在とまともに向き合ってくれた君にはそれなりの好意をもってたよ。暇を持て余した神様の遊びに付き合ってくれて有難うねえ」

「俺とは遊びだったんですか？」

互いに軽口を言い合い笑いあう。

俺の表面を無視して内面を散々荒らしてくれた存在だが、本心をさらけ出して会話したのは本当に久しぶりだった。

厳しいし容赦もないけど楽しかったと思うし嬉しかったとも思う。だから自然と感謝することができて頭も下げられる。

もし自分を変えることが出来たなら、本心を打ち明けられる友達を作ろう。

生前より少しでも真つ当な人間になれるように。

「じゃあ送るねえ。

君の新たな人生に幸多からんことを。

前世の最後の友人として君に神の祝福を」

んなこと言うなよ・・・泣きそうになるだろうが。

ゆっくりと俺の足元から光に包まれていく。

では行ってきます神様。

「あー、最後に一つ訂正しておくねえ」

なんだろう？

今うつすらと涙目な上、思いの外光が眩しくて目がチカチカしてるんだけど。

「最初に見せたあの映像なんだけど。三時間半もないよ。精々二時間ちよい。

何でそんな風に思ったのかしらないけれど、君が時間が解るとかこんなおかしいことあるかーとか痛い勘違いしてたのが気になったねえ。

そこまで指摘するのも可哀想になって思って話を合わせて黙っていたんだけど、言わないままだと僕がスッキリしないから伝えとくねえ。

次の人生じゃそんな痛い思い込みや勘違いはしないように気をつけてねえ。

そんじゃねえ！バイビー！」

言いたいことは山ほどあるし、ツッコミたいことも腐る程ある。

強化された身体能力のフルパワーでぶん殴ってやりたい気持ちだけで溢れんばかりだ。

もう光が身体全体を覆い隠そうとしており、強い光で目を開けることも出来ない。

光の向こうにあのニヤケ面があるかも解らないし、俺自身がすでに消えている可能性もある。

それでも・・・

届かないとしても・・

伝えたいことが俺にだってあるんだ！

「お前の『ね』の時だけ語尾を伸ばす話し方だって十分痛々しいだろっがああっ！……！」

意識が薄れゆく中で俺、次の人生では『ちゃんとしたまともな友人を作ることを決意した。

第四話：人生再出発（後書き）

やっと転生です。

と言っても転生先についてすらいらないのですが……

主人公の身体能力は転生後一旦低下させます。

初っ端からアレでは流石に……

でも一般人と異能者の境目辺りにいる古とか頭一つ抜け出してる楓や刹那だつて無茶苦茶な身体能力ですよ。

強すぎないくらいってどれくらいの能力なんだろう。

主人公は最後まで名前も容姿も描写されなかつたなあ。

ちよつとくらい描写しようか迷つたんですけど、どうせ転生してからが本当のスタートなら今は要らないだろうと結論付けました。

無色透明な主人公と外見無しみたいな神様との絡みだけ。

自分でもラジオを聴いてるような文章だと思いました。

色々な意味で真っ白な世界です。

切実に文才が欲しいです……

11 / 22

主人公の能力に合わせてタグを少し追加しました。

第五話：もう挫折（前書き）

漸く、漸く物語に入ります。

今回は独自解釈、独自設定が入ります。

説明ばかりが続き文章量も多いです。

拳げ句、かなり展開が無茶苦茶です。

文才は・・・文才はどうしたら手に入るのですかっ!？

第五話：もう挫折

「蓮！蓮は何処におるかっ！！」

今日をなんと心得ておる！我らが大願成就の日ぞ！

己の役目もこなさずまた下らんことに時間を費やしておるに違いないわ！！

貴様等もぼさつとしとらんと、あの愚か者を儂の前まで引っ立てこんかっ！！」

「か、かか畏まりましたっ！」

長い白髪を後ろに流し、首の辺りで一本に纏めている強面の老人が烈火の如く怒鳴り散らし、床を踏み鳴らしながら力任せに襖をバンバンと開け放つていく。

いや俺の実の祖父なんだけどね。

女中さんや護衛の男性を射殺さんとはかりに睨み付け、怒声の勢いで『蓮』なる人物を探すようにあちらこちらへと遣わしている。

いやその蓮くんが俺なんだけどね。

神様と微妙な別れを終えて、眩い光の中で気を失い、次に目が覚めた時には此処『秋山家』の長男として生をうけていた。

自分が『秋山 蓮』として自覚したのは二歳を過ぎた辺りで、もしかして「転生」ではなく「憑意」してしまったのかと思ひ、えもい

われぬ不安に襲われたりもした。

幸いにも一歳頃の記憶が臍氣にあり、『秋山 蓮』という人物をのっつたのではないと分かって心底安心したものだ。

流石に元々いた人から居場所を奪う真似はしたくなかったし、転生早々新しい罪悪感を芽生えるのも勘弁してほしかった。

転生後、最初に行ったのは自分の姿を確認することだった。

日本人として生まれたのは理解出来たが、転生オプシオンなんかで銀髪だったりオッドアイだったりしたらその時点で引きこもり生活になっていただろう。

鏡に映る黒髪黒目の幼児の姿にこれまたほっとしたものだ。

因みに俺こと蓮くんは、利発そうで大層可愛らしい顔をしている。

自画自賛の幼児なんて気色悪いと自分でも解っているが、それなりに整った容姿に生まれたのは素直に嬉しいと思う。

容姿と言えば、最近は生前の自分の容姿や名前が思いだせず、どんな生活をしていたかもあやふやになってきている。

秋山蓮という存在が自分と重なり合っていく過程で薄らいでいったのかもしれない。

いずれは自分が転生者だという記憶もなくなり、この世界の一員として埋没していくのだろうか。

未だにこの世界では俺はイレギュラーだという考えが捨てきれないからこのような思いに囚われるのだと思う。

たかだか数年で馴染めというのが無理なのかもしれない。

とまれ色々と悩み事が絶えない秋山さん家の蓮くんだが、せつかくの新しい人生なのだから、明るく楽しく健やかに育っていこうと思っていた。

が、この秋山家。
実に厄介極まりない家柄だったのだ。

俺という自我が確立されてからは、自分がどんな世界で生きていてどんな人物なのかを把握する為の活動を始めた。
よちよち歩きで屋敷内を回り、書籍関連や郵便を盗み見したり、女中さんや側付きの護衛さんの話を盗み聞きして情報収集明け暮れた。そこで解ったことは、秋山家が関東でも有数の名家「だった」という事実。

・まあお察しの通り、秋山家はかつての隆盛の陰が無駄にでかいお屋敷の所々に見られるだけの没落華族でしかなかった。
別にそれだけならまだいい。

この平成の世に華族だ名家だなんて何の足しにもならないんだし、いづれ俺が家督を継いだ時にはこの無駄屋敷を売っぱらって適当なアパートに住むつもりでいるのだから。

大体この屋敷の維持費や人件費を想像するだけで頭が痛くなる。
貧乏性というなかれ。

小心者には居るだけで苦痛になる空間が多いのだ。

まあ没落華族云々はこれくらいにしておく。

問題なのは秋山家のもう一つの顔。
裏の顔こそが一番の大問題である。

それを初めて知ったのは俺の3歳の誕生日であり、俺『秋山蓮』の産みの親である母の命日にあたる日だった。

俺の母は病弱だったらしく元々出産に耐えられる身体ではなかったらしい。

母が自分を産んだせいで死んだというのはショックだった。

俺はこの世界でも人を殺してしまっていると知り、顔面蒼白になり膝から崩れ落ちた。

女中さんが呆然している俺に何やら話し掛けている中で、隣に立っていた俺の爺さんが「お前を産む役割を果たしたのだから元々用済みの女よ。お前も些事にとらわれず、その才能を余すことなく秋山の為に使えよ」という言葉と共に笑いながら去っていくのを見て我にかえった。

元々人間形成に問題のある俺だが、家族に負い目はあっても悪感情を抱いたことはなかった。

それは生前の家族が普通の人達であり、一般的な愛情を俺に与えてくれたからに他ならない。

少なくとも今時ドラマの題材にすらならないような名家にありがちな妄執に憑かれた老人やその犠牲になる人がいることと関わる人生ではなかった。

今生の俺の唯一の家族は俺以上に歪んでいた。

その事実もまた俺の心に暗い陰をさす要因になった。

唯一の家族と言ったことで、これまたお察しの通り、俺の父親も既に故人だ。

昔、何かで負った傷がもとで、母が逝ったあとで追うように他界したらしい。

通りで自我が形成された時に両親の記憶を探っても見つからないわけだ。

前世と今生を合わせどちらの両親にも何も報いることが出来ないらしい。

自分が関わっている人達が不幸になっていることが辛い。

自分が転生しなければ良かったんじゃないかと自問自答を繰り返すのがそれからの日課になった。

ああ・・思い出せば出すほど生きているのが辛くなる。

それでも嫌な思い出だけは鮮明に思い出せるのだから余計陰鬱な自分から抜け出せない。

母と衝撃的な初遭遇したその日の夜。

普段は俺と一緒に食事をとることすらない爺さんが、黒塗りの高級車に俺を乗せこれまた無駄に立派な料亭？でいいのかな。とりあえず皇族御用達みたいなところへ連れて行った。

都内に京都の観光名所みたいな手入れされた庭が見える座敷。

そんな庭の眺めながら長い廊下を歩き、案内役の女性からやけに静かな一室へと通される。

爺さんに続いて中へ入ると、左右対象に並べられた御膳と左右対象ではないものの明らかに一般人ではなさそうな人達が座して俺達を出迎えてくれた。

この時俺は「ああ、俺は没落華族の跡取りで裏家業を取り仕切る頭取みたいな人物の後がまでもあるのか」なんていよいよ困惑と嫌悪感の最高潮を迎え、自分の人生にいつ終止符をうつべきか本気で考えていた。

爺さんが上座中央に座りその隣に俺を座らせる。

まるで見せ物だ。爺さんもきつとそのつもりなのだろう。

周りからの視線を受ける俺を眺め、厳つい顔をさも自慢げに歪めていた。

俺の困惑も嫌悪感も知ろうともせず。

俺も俺で弱気なところを見せないように、無表情ながら視線は真正面を見据え、背筋をピンと伸ばした綺麗な正座を保ち続けた。

誤解のないように頼むけれども、決して爺さんの顔を立ててるわけじゃないのであしからずご了承の程を。

理不尽な爺さんに舐められない為の3歳児にできる精一杯の虚勢なのだ。

3歳児であっても外面を取り繕う技術は十全と言えよう。

流石は俺だ。こんな風にならないように転生したのに全く変わっていない。

神様に語ったあの時の思いが急速に褪せていくのを感じる。

外面とは裏腹に内面は絶賛闇へと沈下中。

左右に座す人達からも視線と共に「秋山の御子」とか「莫大なる魔力が・・・」とか「稀代の術士に・・・」とか胡散臭い言葉が途切れ途切れに聞こえてくる。

断片的な言葉からだけで推測しても、裏は裏でもオカルト的な裏家業だというのは間違いないだろう。

これで違ってたなら、ここに居るのはイイ年したオカルトマニア達で、この集まりは痛いマニア達のオフ会になる。

なんて嫌な空間だ。

神様空間より酷い。

陰鬱に暗澹とした気持ちも加わり、正座を保つのも限界近く、瞼も重くなってきた。

3歳児の身体では夜更かしが出来ないのだ。生理現象が大人より強く現るのを実感する。

別にそんな俺に気付いたわけではないだろうが、隣の爺さんが立ち

上がり、実際の年齢より張りのあるよく通る声を上げる。

「今宵の会合に集まってくれた皆に秋山家当主として感謝する。此処に居る者は皆一様に西洋に対し苦渋を飲まされておろう。我らが国土に不相応にも居座り、我らが永きに渡り護り崇め奉ってきた神樹を掠めとるといふ暴挙ともいえぬ愚劣極まりない所業にまで及んでおる。

更には皆の記憶にも新しかろうかの大戦にて、我らが同胞、我らが家族、そして我らが名誉を汚し喪わせた。

儂の子も大戦に駆り出され、愚鈍な西洋の愚物に狗のように扱われその際の負傷がもとで命を失った。我が秋山の由緒正しき血脈を我が国の呪術の礎たる血脈の一つを絶たんとしたのだ。

儂は決してあの下衆共を許さぬ。

西洋の狗畜生共をこの国から追い出さねばならぬ。

それだけではない。

西洋に恭順し誇りを失い狗に尾を振る裏切り者共も排除すべきなのだ。

唾棄すべき塵共だ。

奴らに我らが味わった屈辱を億倍にして返し、我らが流した血涙を毒と共にのませてやろう。

雌伏の時はいずれ過ぎ去る。

何故ならば、秋山家開祖以来触れられる者の居なかった『神殺しの

神剣：天之尾羽張^{アメノオハハリ}』を手に取る者が現れたのだ。

それが我が孫である蓮よ。

秋山に御子が降りたのだ。

神代の頃より語り継がれる神剣と日本呪術の直系の一つである秋山の麒麟児が揃えば西洋の愚図共は木っ端の如く散らされよう。

皆よく聞け。我らは必ず西洋の魔法使い共を地獄に叩き落とすであろう。そしてその時はもう間もなく訪れよう。

皆その時を地に伏せ、陰に隠れて待つのだ。奴らを血祭りにあげる

その時まで。

皆の願いは儂の願い。

思いは同じぞ。

今宵交わした誓いは必ず果たそう。

儂と蓮は皆の変わらぬ忠誠を信じておる。

これからも我が秋山家共に守っていこう」

爺さんと集まった人達の「秋山家万歳」「関東呪術一派万歳」を俺は舟を漕ぎながら聞いていた。

そして夢現に一つの解答に辿りついていた。

「ああ、これ多分『ネギま』だと」

とまあ突っ込みどころ満載の「『関東』呪術一派」の皆さんとの会合の思い出を振り返っていたらドタドタと床を踏み鳴らす音が近づいてきたことに気付く。

俺の後ろの襖が外れるんじゃないかと思うくらいの音を立てて開き、

騒音の張本人が鼻息荒く俺の側までやってきた。

「運っ！！貴様という奴は今日が何の日か知っておるうがっ！！」

「御爺様、その様に怒鳴ってはお身体に障ります。お医者様からも血圧が高いことを指摘されておられましたでしょう？」

「そう言えば処方された薬をまた捨てられたそうですね？いけません御爺様。」

病気の再発や悪化の背景には薬の飲み忘れや服用の中断が理由であることが多いのです。お医者様を盲信せよとは申しませんが、素人判断で治療を中断せずお医者様と相談なさった方がよいかと思考する次第です。

ああ、なんでしたらセカンドオピニオンというのも・・・」

「喧しいわっ！下らぬことをべらべらと宣いおって！！」

そんな話をする為に来たのではないわ！

儂らにとって今日がどれほど大事な日か忘れたとは言わさんぞ！！」

「ええ、ええ。存じ上げておりますとも。」

しかし御爺様。御自身の健康の為の話を『下らぬこと』と言って捨ててはいけませんよ？

私のような若輩が御爺様のような方に苦言を呈するなど不遜な行いであると理解しております。

しかし私の親族は御爺様ただお一人。

御爺様の身に何か良くないことが起こり、私一人になってしまったらと思うと胸の内に不安が波のように押し寄せてくるのです。

御爺様、どうか愚かな孫の願いを聞き届け、治療に専念なさって下さいませ」

「そんな話はどうでもよいと言っておるのが解らぬかっ！！」

大体薬ならば我が配下の医療術士が用意した秋山家秘伝の妙薬があ

る！」

「ああ、御爺様それはいけません。

代々家に伝わる秘伝の万能薬等というものは大半が怪しげで不確かな物が殆どなのです。

滋養強壯、栄養補給といった類いの物ならまだ良し。

なかには荒唐無稽な代物が御座いまして、先日私が訪問したお宅の年配の男性は万病に効くと言ってなんと御婦人用の薬を常用なさっておられました。

微笑ましい話とも取れますが、裏を返せば正しい治療がなされておらず、知らず知らずに病を増悪させてしまう恐れがあるのです。

聡明な御爺様ですから私の申したいことなど既に把握しておられるでしょうが、敢えて進言させて頂きますと、そんな怪しげな薬ではなくお医者様のもと、適切な治療を受けるべきなのだと再度お勧め致します。

ああ、そうです。私が病院へ診察の予約をとって参りましょう。

『善は急げ』という先達の言葉もあることですし。

では私が病院へ電話をしている間に御爺様を外出用のお召し物にお着替え下さい。あと女中のお花さんにハイヤーを屋敷の前に回すようお願いしないといけませんね」

「その要らぬことしか言わぬ口を閉じんかつ！」

大体由緒正しき秋山の妙薬を怪しげとは何事かつ！！

今日は！今日こそは僕らが悲願を果たす為の大切な・・・」

「御爺様。今日が大切な日であることなど重々承知しておりますとも。

だからこそ私はこの場に居るのですよ？」

「そ、そうなのか？分かっておるのだな！？それならば・・・」

「ええ、今日は『母の命日』で『私の十四歳の誕生日』ですよね御爺様」

それだけ伝えて仏壇への合掌を終え、隣りで呆けた顔の爺さんに微笑みかけながら耳元でボソボソと囁く。

病院へ電話を入れる為に退室し、爺さんが開けたままにしていた襖を通り後ろ手でびっちり閉める。

背後で『何か』が倒れるような音を確認して足早に立ち去る。

携帯を片手に屋根の天辺まで一足で飛び上がることで屋敷内の面倒事から逃げ出した。

はい、改めてまして自己紹介を。

秋山蓮、十四歳！

麻帆良学園男子中等部二年生！

クラスでは保健委員をやっています。部活動はせず、週に一、二度ボランテニア活動に参加しています！

趣味は勉強。

将来の夢はお医者さんになることです！

内側と外側がちぐはぐでバラバラで。

心にもないことを心が動く前に口に出し。

相手が言いたいことをはぐらかし。
聞きたいことを煙に巻き。

かと言って相手を納得させることもしないし理解を得ようとしてもしない。

好かれようと明るく振る舞い、好かれても常に同一な態度と姿勢と表情で一定以上には近よらせない。

見掛けは全て誤魔化しで見せ掛け。

着飾っているのはずっと着続けて草臥れた嘘の自分。

そして心中は常に後悔と悲嘆と諦観で溢れ。

思考は常に後ろ向きで卑屈で逃げ腰で埋まっている。

そんな歪な存在に俺と私は成りました。

屋根の上で「御爺様が倒れて意識不明なんです！救急車をお願いしますます！」と慌てふためく演技をしながら住所を伝えて電話を切る。

携帯電話を制服のスラックスのポケットにしまう為身を擦る。

その動作で生じる僅かな体重移動でも屋根の瓦がカタカタ鳴る。

4月初旬の今日は曇天で少し風があり肌寒く感じる。

制服のブレザーは部屋に掛けたままなので、カッターシャツ一枚では屋根の上はちょっと辛い。

「せめてセーターくらい着とけば良かった」

嘆息しつつ呟く。

ずっと前から独り言が癖になってしまった。

「神様。俺やつぱり駄目だったよ」

3歳時の御披露目の日から、俺は自分の修正が追い付かなくなっていった。

爺さんの秋山家の秋山家による秋山家の為の演説のあと、大人達が「蓮様！蓮様！」と殺到してきた。

眠くて仕方ないのに

「蓮様お菓子をどうぞ！」「蓮様ジュースをどうぞ！」「蓮様果物をどうぞ！」

と矢継ぎ早に差し出される食べ物で俺の御膳は滅茶苦茶になっていた。

配慮が足りないというか空気の読めない関東呪術一派という集団は、世界樹のある麻帆良を攻め落とし、西洋魔法使いを追い払い、再び自分達の手の世界樹と関東の魔法呪術関係の実権を取り戻すが目的らしい。

らしいというのは、関東呪術一派が『一派』と言うだけあって一派閥の弱小団体でしかなく関東呪術師全体の総意ではないからだ。関東にもそれなりの大きさの呪術関係の団体はある。

それでも関東一帯の魔法や呪術関係を仕切っているのは、麻帆良にある「関東魔法協会」であり、関東の数多の派閥、団体の大本である関東呪術協会もその傘下になっている。

傘下にいるとはいえ呪術協会も好き好んで従っているわけではない。

江戸幕府から明治、大正、昭和と国政の中心であり、国の象徴の住まう帝都でもあった関東一帯の呪術守護は重要な役割だった。本家京都の関西呪術協会とは仲良しこよしな関係ではなかったが、日本を守護するという役割を互いに理解し組織ぐるみで協力し合える間柄だった。

これは俺個人の解釈だが、呪術協会は関西がお兄ちゃんて関東が弟お兄ちゃんは長いこと仕事をしてきたから実績があつて本社の京都勤務。

弟は仕事始めは遅かつたけれども、一番大きな仕事を抱えており、社長（国政機関）や会長（天皇）の覚えもいい。同じ会社（日本）に勤めているから、業績で負けたくないけど敵ではないし、会社を守るなら力を合やすことも出来る。それなりの関係で上手くやってこれてはいたのだ。

その関係に亀裂をいれたり事態をややこしくしてくれたのが、西洋魔法使いを中心とする魔法協会。

日本有数の神霊地である世界樹を含む一帯を選挙されるわ、魔法世界の大战で召集令状よろしく呪術協会の面々も駆り出されボロボロにされるわで、呪術協会は疲弊しまくつたのだ。

特に魔法協会と距離的に近しかった関東呪術協会の有り様は酷かった。徴収された人員、物資は同じ量だったとしても関西とは組織の規模が違う。

組織の体裁をギリギリ保てるかどうかという力しか残ってなかった関東呪術協会が存続する為の選択支は少なかった。

関西に吸収されるか魔法協会に降るか。

関東から呪術協会がなくなれば、関東一円は魔法協会に独占される。魔法協会に従えば、それは事実上敗北宣言となる。

じゃあ魔法協会と戦うのかというと、魔法協会のバックにはメガロメセンブリアという魔法国家が存在しており、たかが一組織のかなり相手ではない。

困窮し疲弊しきった関東呪術協会内では意見が割れに割れて、それを收拾できるような有能な人材を多数失ったこともあり、組織内の対立や派閥化が進行。

結果、関東呪術協会は瓦解する。

あとは分裂なり独立なりした各派閥や団体がそれぞれ独自で行動する。

吸収されたり、恭順したり、反抗したり。

で、今に至るわけである。

俺は御披露目後は呪術や魔法について大っぴらに触れられるようになり、秋山家にある術書や魔法書も読み放題になった。

そこで関東呪術協会の文献を見つけ、大まかな組織の変遷を知った時は、関東呪術協会の悲惨さに泣きそうになった。

関東魔法協会についての団体は、国内から白い目で見られ売国奴扱い。

関西呪術協会に庇護を求めた団体は、関西の下請けの下請けの更に更に下請けの町工場の従業員扱いの上、関東を守れなかった連中だ

と見做され肩身が狭い。

反抗なんかした団体は、その殆どが壊滅。
個々で活動する小規模団体の中には、汚い仕事を主とする半ば犯罪組織みたいなものに成り下がったものもある。
当然そんな輩は嫌われ者である。

そして俺はその嫌われ者と壊滅した組織の生き残りで構成された弱小派閥の代表候補。
俺涙目である。

更に付け加えるとその関東呪術一派は、時勢に乗り遅れた間抜けや偉い人に脳みそ預けっぱなしの馬鹿や古き慣習と家柄に縛られた阿呆ばかりで、もう終わっちゃってる人達の集まりなのだ。

そしてその残念一派は麻帆良、ひいては西洋魔法使い全体に対して抗争を仕掛けている。
この俺を旗頭にして。
俺号泣である。

転生補正というべきか、俺は生まれもった魔力がやはり桁違いらしい。
生まれた際にそれを感じとった爺さんは、出産後容態が悪化した俺の母親に目もくれず、俺を抱えて屋敷の最奥まで走っていったらしい。

そこに奉納されていた神剣『アメノオハハリ天之尾羽張』に新生児の俺が触れられたことに狂喜乱舞。

「秋山開祖の再来」と狂笑し続けたとか。

『天之尾羽張』は故事神話の世界の代物であり、実際に存在するものではない。

仮に京歩譲って本物が存在したとしても人に御せるモノではないのだ。

アレは神剣であり神の一寸。神殺しの刀で神殺しの神である。

そんなモノをたかが呪術師如きになんか出来る訳がない。

そういうわけで、秋山家開祖が何を思っただにそんな大層な銘をつけたのか知らないけれども、特定の人間以外は触れられない呪い付きのパチ物であることは間違いないだろう。

赤ん坊になんて物を触らせやがるんだ爺さん。

話がちょっと逸れたけど、凋落著しい秋山家と関西呪術一派にとって、俺という存在は状況を逆転させらせる鬼札と考えられている。幾ら魔力が高いからといって幼児を利用するなんて呆れた連中だ。

それからというもの、俺は爺さん達から歪んだ洗脳英才教育が行われた。

『西洋魔法使いは悪』という爺さん達の怨敵であるメガロメセンブリアの元老院も真つ青な視野狭窄の閉鎖環境に追い落とされたのである。自分が転生者でなく普通の幼児だったらどんな成長を遂げただろうと想像すると薄ら寒いものがある。

二次創作やなんかで子供先生の歪さや不自然さが強調されているが、自分が同じ立場になってみるとあの程度の歪み方なのがすごいくらいだと思える。

父親を追うという信念があるとはいえ、ひたむきさを失わず純粹さを忘れないのは驚異だ。

なんだかんだで流石は主人公。やはり俺みたいな奴とは違いすぎる。

また話が脱線してしまった。

ともあれ、俺の方は自分の歪みを矯正して真つ当な人生を送るどころか、俺以上にぶっ飛んだ大人と環境に囲まれ、見事更正に失敗したのだった。

爺さん達にとって都合のいい存在を演じながら、能力に磨きをかけ。爺さん達のご思想と思惑に乗った振りをしながら、自分が生き残る為の逃げ道を模索し。

爺さん達と秋山家の栄光を取り戻す夢を適当に語り誤魔化しながら、俺の人生の障害になりうるものを排除する為の準備を整えてきた。

そして去年、爺さんの命で敵である麻帆良学園に潜入するため男子中等部に入学させられ。

晴れて二年生になったこの日、俺の準備と関東呪術一派の準備が全て整った。

妄想と妄執を高らかに掲げ、猛然と猛悪に突き進む、盲目と盲信の天の下へと続く道。

正道を外ずれた者共が辿る道は、いつだって地の底にしか続いていない。

さあ滑稽な三文芝居に興じよう。

外道共よ。満願成就の時がきた。

「もしもし。ガンドルフイーニ先生ですか？

私です。男子中等部二年の秋山です。

お忙しいところ申し訳ありません。

お話ししたい事が御座いまして、お時間を頂きたいのですが今の時間は大丈夫でしょうか？

有難う御座います。

それでお話ししたいことの内容なのですが・

ええ、そうです。

お察しの通りです。

先生は若輩者の私のことなどお見通しなのですな。

ということは周囲の人払いもお済みで？

流石先生です。私などが気を回すまでも御座いませんね。

そんな、とんでも御座いません。私など未熟で浅薄な若僧でしかありません。

先生のお心遣いに深く感謝致します。

ああ、いけませんね・先生からの温かいご配慮に甘え、肝心の内容をお伝えすることを失念しかかりました。

自身の未熟さに辟易してしまいます。

では・・・

彼等は今宵、かねてよりの計画を実行にうつすようです。

学園の春休みに合わせ極力一般人を巻き込まないように考え、人払いの呪付も大量に用意はしているようですが。

そもそも、このような暴挙に出ること自体、他者の安寧を脅かすことになる何故気付くことが出来ないのでしょうか・・・すみません。自身の不甲斐なさが悔しく感じまして・・・

いえ、私も彼等の暴挙を止められなかったのです。同罪であると思うのです。

力がなかったことなど言い訳になりません。

私自身にもう少し力があれば、先生方のお手を煩わせることもなかったのにと。

悔やんでも悔やみきれません。

・・・今は嘆いている時ではありませんね。

彼等は日が落ちる頃には秋山の屋敷に集まる手筈となっています。そこから麻帆良の結界を中から私が崩し侵入。

魔法先生、生徒を強襲し捕縛または暗殺しつつ主要施設を占拠。

彼等が狙うのは先ず学園長や先生などの戦力です。

本来の目的は世界樹だったのですが、今や妄執に取り憑かれた彼等は、西洋魔法使いへの直接的な報復を望んでいるようです。

恨む理由があつたかもしれませんが愚かなことです・・・

彼等が麻帆良に辿り着く前に捕縛するべきなのでしょうが、秋山の屋敷は呪術で守護されており攻め入るのは危険ですし、もしもの時の逃走経路も御座います。

移動中に確保するのも何人が取り逃がす恐れがある以上やめておく方がよいでしょう。

ですので私が彼等を学園内に侵入させたところで彼等の周囲に捕縛用の呪を施します。

私程度でも数分は保たせられかと思えます。

先生方は離れた位置に潜み、私が合図をしてから駆けつけて頂きます。

す。

・・確かに私の身は危険に晒されます。

先生方が来られるまでに私の呪が破らないとも限りません。しかしこれは私の役目なのです。

彼等を諫めることが出来ず、愚かな行い起こさせる要因となった私の贖罪なのです。

事態が収束した後は私も彼等と共に裁きを受けるつもりです。

いえ・・いいのです。私も彼等の一派なのですから。

私は正義の協力者ではなく、ただの裏切り者なのです。

ですからガンドルフィーニ先生が私なんぞにお心を砕いて頂かなくてもよいのです。

その言葉だけで私は十分救われております。

どうか正義として正しいご裁量を為さって下さい。

どのような結果でも甘んじてお受けします。

学園長や他の先生方にもお伝え下さい。

侵入経路と場所、私と彼等の到達予測時間については、判明次第、式を飛ばし通達致します。

恐らく電話をすることは難しいでしょうから。

では夜にお会いしましょう。

失礼致します」

第五話：もう挫折（後書き）

原作キャラが名前だけです。が初登場です！
やったー！！

そして主人公も名前が出ました。
容姿についてもちょっとだけ描写されました。
ちよつとだけだからキャラの輪郭が未だにふわふわしてますが。
内面もふわふわしてるし外見も適当でいいかなあと思ったり。

主人公は呪術関連を幼少時から叩き込まれ、普通の術士と同等程度の能力があります。
転生時に付与された能力については、適当に誤魔化しながら使っていくと思います。

主人公はなんか色々諦めちゃってるからおかしな技や術を使うことがバテても

「別にどう思われてもいいや、面倒臭い」
とその場をしのげたら良し。しのげなかったら諦めて流れに任せる
といった思考です。

最終的にキャラがどこに着陸するのか私にも不明です。

第六話：後の祭り（前書き）

とりあえず投稿できるうちに、バンバン出していきます。

「ネギまー！」「って可愛い女の子がいっぱいいる話じゃなかったっけ？

第六話：後の祭り

懐かしい独特の空気感と匂い。

ある種の隔絶とされた世界。

この住人であることを示すような統一された服装の人と、外界から入ってくる一般的な洋服の人とが互いを意識しながらも注視しないことが暗黙の了解であるかのようにすれ違う。

見ることが失礼。

意識することが無礼。

何に対する引け目はわからない。

潜在的な忌避。

一般人であった自分が一般的に振る舞う術を奪われたかのような住人達。

淡い色合いの壁と床。

決して清潔になんかならないのに、狂ったかのように環境を清潔にすることに拘る空間。

安全と安心と安楽を提供する癒やしの場。

不安と不自由と不吉を突き付けられる生死の境界。

俺が人の全てを犯し奪い踏みにじった罪悪の現場。

実態を知らない人から天使扱いされる白衣の職員に目的の部屋を確認し、妙に粘つくような気分がする廊下を歩く。

部屋の番号とネームプレートに表示された名前に間違いがないことを確認して数回ノックする。

向こうからの返事がないが「失礼します」と入室する旨を伝えドアノブを捻り扉と身体を一緒に前に押し出す。

入室する際に少し下げている頭をあげると、丁度中に居た人物と目が合い思わず笑みを浮かべてしまった。

「お身体の調子は如何ですか御爺様？」

看護師さんから伺ったのですが、お目覚めになられてから何やら妙なことを言っておられるとか？

『呪術』とか『魔法』とか。

ああ、ご安心下さい。

『祖父は迷信深く、生粋のオカルトファン』だと説明しておきましたので。

あとこの雑誌を床頭台に置いて頂けますか？

これで看護師さんも納得してくださると思います」

顔面どころか全身も真っ赤になるんじゃないかと思うくらいに怒りのオーラを噴出する爺さんに、俺はそっとお見舞いの品として『ムー』を差し出した。

昨夜の関東呪術一派の計画筒抜けの復讐劇は、ものの十数分で俺

を含め関係者全員が確保された。

何年も前から今日という日を妄想してきた呪術一派の連中は、あまりと言えばあまりの結果に顔色を赤白青と実に多彩な変化を見せていた。

そこから俺のとつた行動への罵声に怒声に悲鳴が飛び交い、様々な悪口雑言も加わり聞いているのに疲弊し俯いている俺の肩にガンドルフィーニ先生の大きな手が置かれた。

顔を上げるとガンドルフィーニ先生の精悍な顔が俺の数倍は辛そうで、それでも俺のことを労るように真摯な眼差しで見つめていた。

俺は心配はいらないとばかりに弱々しく笑みを浮かべると、『自身の良心に従い、多く人々の悲劇を食い止める為に自らを過酷な状況に置いた少年』を装う。

そんな俺を見て苦渋の表情をより強くするガンドルフィーニ先生を眺めながら

『なんでこんな良い人が二次創作では割を食うことが多いのだろう？』
なんて考えていた。

関東呪術一派の連中は、俺を利用しようとしただけでなく、復讐の為の資金集めと称し、拉致や誘拐、傷害や殺人まで行っていた。事件の背景にどれだけの悲劇があるうとも、人として越えてはいけ

ないラインを軽々と踏み越えてしまっている連中には同情する気にはならない。
ましてや復讐の理由に利権や打算まで絡んでいるのだから尚更だ。
連行される彼等にはしつかりと罰を与えてほしい。

しかし、かく言う俺もそんな輩と大してかわらないのだ。
犯罪行為で得られた金銭は、活動資金だけでなく、秋山の無駄屋敷の維持費はその血にまみれた金でまかなわれていた。

没落華族に権威も資産もなく、薄汚い虚栄心は更に汚れた利己主義で支える。

不快極まりないが、俺が生きて成長する為の糧はそれによって提供され、俺はそれを知りながら

『今の自分にはどうすることも出来ない。だから嫌々だけど我慢して受け入れる必要がある。でも本心は違うんだ』

と自己弁護して、犯罪行為を諫めることも非難もせず唯々諾々と爺さんや一派の連中に従い続けていた。

結局今回の一件は、俺の良心に基づいた正義の行いなんてものじやなく、爺さん達への悪意と意趣返しであり、犯罪に荷担していたんじゃないという言い訳と、そんな状況にいることへの後ろめたさと後悔から逃げ出したかったのが理由なのだ。

その為にガンドルフィーニ先生の良心と正義感を利用して、保身の為に身内を売ったという凡そ正義の主人公から程遠い行為だったわけだ。

「つくづく自分が嫌いになるよ」

事件の詳しい経緯の調書をとったり証拠関係の提出などがある為、重要参考人として俺は先生方に促されるまま、星の光も街灯の灯りも乏しい、闇色に染まった木々の間をトボトボと歩き続けた。

side 学園長

「学園長！秋山君に対する寛大なる処置をお願いします！
彼は善良で誠実な少年です。」

今回の一件も彼が私達に情報を提供し、自身が矢面に立ってくれた
からこそ、被害も出さず解決出来たんですよ！？」

「わかっておるよ、ガンドルフィーニ君。」

秋山少年の協力がなければ相応の被害があつたであろうことも、彼
が提出してくれた証拠がなければ呪術一派や関連組織の犯罪行為の
立証も叶わんだこともな」

「でしたらっ!?!」

「それでも、彼を何事もなく無罪放免にすることは簡単にはいかな
のじゃよ・・・」

全くもってままならぬことじゃな。

何度目かの溜め息をつきつつ椅子の背にもたれかかる。

しずな君が気を利かせて入れてくれたお茶も手付かずのうちにス
ツカリ冷めてしもた。

今夜の一件。不遇な立場に追い込まれておった関東由来の呪術系派閥の暴走は、その境遇を鑑みればわからんでもない。彼等にも言い分はあるう。

じゃが、その為の手段として他者を害し殺めようとするなど言語道断。

更には秋山少年の提出した資料を流し読みしただけでも、儂の年齢を上回る程の犯罪履歴がある。

半ば強制的に傘下に入ったため、御しきれておらんかった関東の呪術一門じゃが、儂らの膝元でこつも狼藉三昧を繰り返しておったとは。

各組織への訓告だけでなく査察や直接的な指導も行わなければなるまい。

・・こりやしばらく忙しくなるのう。

頭を抱えたくなるが、先生方の前で最高責任者がそんな態度をとるわけにもいかん。

変わりに伸ばし放題になつとる眉毛を撫でつけとくか。

さしあたっては先ず件の秋山少年のことじゃな。

昨年男子中等部に入學した時から話題にはあがつとつた。

『関東呪術の名家、秋山家の秘蔵っ子』

『莫大な魔力をもつ麒麟児』

他にも色々と異名をもつておつたが、外部に姿を見せたことは数えるほどしかなく。

屋敷から殆ど出ることのない正に『秘蔵』された存在じゃつた。そんな子じゃからな、そうなる理由もわかる。

儂らとて、木乃香が生まれてからしばらくは徹底的に守護し、外部との接触は極力避けておつたからのう。

莫大な魔力をもつ名家の幼子なぞ、欲や悪意に満ちた輩からすれば利用価値に溢れた宝物に映るじやろ。名家という立場も敵に事欠かんしろう。

そんな少年がいきなり麻帆良に入学してきたのじゃ。

そりゃあ結構な騒ぎになっとったわい。

好意的に見てくれればよいが、奇異の視線や品定め、中には呪術協会の刺客という者もおったのう。

当たらずも遠からずじゃったがの。

秋山少年は木乃香と違い、幼い頃より呪術を学んでおった。

魔法関係者として入学することになるので、秘匿の説明を名目に儂が対面することにした。

関東秋山の秘蔵っ子にも興味があったからの。

実際会ってみるとなかなか面白い少年じゃった。

折り目正しく礼節を弁えておるし、物腰も柔らかい。

細面で丁寧に切り揃えられた髪から覗く目も切れ長で鼻筋も通っておるが、年相応の幼さの残る面差しが愛らしさを感じさせた。同年代の子と身長は大して変わらぬが、鍛えておるのだらう、細身ながら引き締まった体格をしておった。

「こりゃ成長すればさぞかし良い男になるわい」と感嘆したもんじや。

魔力は制御しておるのかパツと見ではわからぬが、内包しておる力は確かに強大だと感じた。

そのことを聞いたら

「恥ずかしながら制御は苦手です、家中にあった呪具と家の者に呪印を施してもらって制御しているのです。」

無闇に力をみせないように祖父に厳命されておりすし」と困っているような笑みを浮かべておった。

思った以上にしっかりしており、力の有用性と危険性も把握しておる。

孫の木乃香とそんなに年が離れておらんのに大したもんじゃ。

秘匿についても十分に理解しておったが「刑に服するのは嫌ですが、オコジョになるというのはちょっと興味がありますね」と思案しておる様は、まだ少年の粋を出していないのだと感じさせ微笑ましかつたのう。

入学以降は勉強も生活態度も真面目で好感を持てる可他の先生方からも聞いており、申し訳ないと思いつつも監視をつけていたが不審な行動はないと報告された。

高畑君にも接触してもらったが、
「彼自身はこちらに害を及ぼすことはないでしょう。生まれ育ちを抜きにすれば普通の生徒ですよ」とのことじゃった。

秋山少年自身はシロ。ただし背後関係は灰色というのが僕の結論であつた。魔法関係者である為、何人かの魔法先生を紹介したが、背後関係が不透明な以上、こちらに関わらせるには訳にいかず、彼も学外の秋山家から通学しておつた為、不要な接触は避けるように通達しておいた。

じゃから彼が入学をして何事もなく一年が過ぎようとした先月。秋山少年自身からもたらされた『秋山家とその一門による犯行計画』

は寝耳に水もいとこじゃったわい。

ガンドルフイーニ君なんかは、すぐさま秋山家を糾弾しに行こうとしておつたが、事を起こしとらん状況で追求してもかわされるだけじゃ。

また衰退したとはいえ関東呪術協会の名門だった秋山家を一方的に責めようもんなら、他の呪術団体や組織がどんな反応を起こすかもわからん。

それに秋山少年から情報が漏れたと知れたら、彼の身が危険に晒され恐れもある。決して迂闊な真似は出来ん。

かといって放置出来る問題ではない為、早急に対策を練らねばならなかった。

情報が欲しい。そう思った時、秋山少年が計画実行までの情報提供と、秋山家と呪術一派の不正や犯罪の証拠を収集する為の全面的な協力を申し出た。

有り難い話ではあつたが、彼が其処まで協力する理由がわからなかった。

善良な少年じゃと思つとつたが、身内を糾弾出来るような信念や覚悟をもつような人間には見えなかつたからのう。

じゃが『何故君は其処までするんじゃ？』と問うたことは不覚じやつた。

秋山少年の口から語られたのは、祖父や一派による幼少時からの過酷な修行。

悪意と憎悪と妄執による西洋魔法使いへの排除を抱かせる為の洗脳染みた教育。

寝物語のように聞かされる関東呪術一派の悲惨で無惨で哀れな境遇。

そして何より、自身の周囲の人間が犯罪行為を平然と行っている事実。

まだ少年の域を出ておらん彼に話させるにはあまりに酷い内容じやった。

一緒に聞いておったガンドルフィーニ君は全身から怒りを滲ませ、高畑君も不快感に顔をしかめており、しずな先生は沈痛な面持ちで秋山少年を労っておった。

儂は木乃香と秋山少年はよう似た環境で、魔法を知っておるかそうでないかの違いしかないと思っておった。
事實は違う。違い過ぎる

木乃香は皆に愛され庇護されておる。

秋山少年は誰からも愛されず道具として扱われておる。

入学して間もない時に対面した際も、人伝に聞く彼の様子も、いつも礼儀正しい年相応の少年だと思えんかったのに。

今ここにおける彼は、大人へと成長していく過程を飛ばして作り上げられた歪な青年のように映る。

何故気付かんかったんじやろう。

この少年は、立ち振る舞いも、語る言葉も、在り方も、その全てが何一つ『普通』ではないのだと。

「学園長っ！！聞いておられるのですかっ!?!?」

「フオッ!?!?う、うむ。ちゃんと聞いとるぞい、ガンドルフィーニ

君」

いかんいかん。ちと以前のことを思い出しておったら、目の前の問題のことを忘れておったわい。

こんな姿を見せとつたら呆け老人扱いされかねんのう。

「ガンドルフィー二君。先程も言ったがあの少年の処遇は簡単に済ませられる問題ではないのじゃよ」

「だから何故なんですかつ！

その理由をお聞かせ下さいっ！！」

「彼の出自と立場じゃよ・・・

没落したとはいえ、彼は関東の呪術の名家秋山家の次期当主じゃ。

今回の一件では儂らに協力してくれたが、彼の所属はあくまで呪術一派であり関東魔法協会の所属ではない。

しかも奴らの計画遂行の為の最も重要な役割をもった中心人物なのが彼じゃ。

彼自身に罪はなくとも、儂らが彼を庇うことは対外的は難しいのう・・・」

更には強大なあの魔力じゃ。

秋山家は今回の一件で今度こそ完全に潰れる。

そうなれば、行き場を失った秋山少年を抱き込もうとする組織や団体はあの手この手で接触してくるじゃろう。

それを儂らが保護すれば「関東魔法協会に呪術の名門の子を奪われた」と反感や怨恨を抱かせることになる。

それは関東魔法協会と関東の呪術団体との溝を更に深めるだけでなく、新たな騒乱の火種となるのは間違いなからう。

そこまで言って冷たくなつたお茶を一口啜る。
茶の味がやたらと苦く感じるわい。

ガンドルフィーニ君も事情を理解したのか声を荒げることはないが、「しかしそれではあまりに・・・」と渋面で苦々しそくに唸っておる。

「学園長。魔法協会で彼を保護出来ないのであれば、関西呪術協会に保護をお願いするのはどうでしょうか？」

ガンドルフィーニ君が言葉に窮しておるかわりに、静かに控えていた葛葉くんが話を繋ぐ。

「それも厳しいのう。」

確かに魔法協会よりは対外的にマシじやろつが、関西呪術協会にも関東の流れを汲む呪術師が多い。

向こうで大人しくしておる奴らを刺激しかねん。

それに関西の長である婿殿は近衛の一員じゃ。

魔法協会でなく『近衛に秋山の子を奪われた』という風に受け取られ方が変わるだけじゃよ」

葛葉くんも元々無理だと思つておつたのか「そうですね・・・」とだけ言つて引き下がった。

他の先生方の表情は冴えない。

秋山少年を取り巻く環境の不遇さを哀れと思つておるが、如何ともし難い状況を理解し何も言えないようじゃ。

無力感は儂も一緒じゃよ。

「あのう・・・学園長」

ガンドルフイーニ君の後ろから、瀬流彦君がおずおずと顔を出した。

「ちよつと話が逸れるのですが、今夜捕縛した呪術一派の中にもう一人の重要人物である秋山家の現当主の姿が見当たらなかったんですけど」

「それについては秋山少年から聞き及んでおる。

秋山の当主は今朝方に倒れて入院中らしいのじゃ。

入院先の病院にも確認して所在はこちらでも掴んでおるから心配いらん。

それにの・・・」

秋山少年が儼らに協力する為に、彼が唯一提示した条件。

穏やかな少年の瞳に映った、彼の他者に見せないようにしていた暗い闇色の情念。

歪んでいる彼の本質の一端。

「『祖父のことは自分で決着をつける』」

それが秋山少年の望みじゃった。

「・・・という訳で秋山家並びに関東呪術一派の長年の悲願は、一夜の夢の如くさらりと過ぎ去り終焉を迎えたので御座います。今朝までお眠りであった御爺様に、夢から覚めたというのは言い得て妙で御座いましょう」

入室するなり激昂して俺を出迎えた爺さんに、昨夜の顛末を俺の暗躍もネタバレしながら説明する。

爺さんはもう浮き出た血管が切れて血が噴出しそうなくらい喚き散らす。

血圧高いんだから興奮し過ぎると冗談抜きで脳卒中になりかねない。

ここは病院だからすぐに診てもらえるだろうし、元々そんなこと心配はしてないけど。

「御爺様。人払いは済んでおりますが、ここは病院です。大声をあげるとは他の患者様のご迷惑になりますのでお控え下さい」

「ふざけるなっ！！」

誰のせいでもうなつたと思っておるかっ！？

よもや儂らの悲願をよりにもよって貴様に阻まれるとは！

魔法協会に尻尾を振り、関東呪術を裏切るなどこの恥さらしがっ！！
貴様に名門秋山の誇りはないのかっ！？」

そんなもの。

そんな糞みたいなもの。

そんな毒みたいなもの。

「俺は欠片も持ち合わせちゃいねえよ。

なあ、爺さんは俺の何を見てきた？

秋山の為に身も心も尽くすように見えたか？

あんたの有益な道具として生きていることを享受しているように見えたか？

見えてなかっただろうな。

今の俺の姿を見てそんな顔してんだもんな。

秋山蓮という存在をその力以外で見たことなんかなかったもんなっ
！！

しつかり見るよ？これがあんたが見てこなかったモノだ！

あんたが俺を、俺の本質をちゃんと見ていりゃこんなことにならない
かったんだ！！

くだらない悲願が失敗したの俺のせいだよ。

そしてあんたのせいだ。

あの下衆一派の連中にも謝っとけよ？

『耄碌した儂の濁り腐った目と生塵みたいな妄想のせいで散々迷惑
かけてごめんなさい』

つてなあっ！！」

神様のところに居たとき以来だ。

こんなに感情に身を任せたのは。

爺さんの呆気にとられて口をパクパクしている滑稽な姿を見て、
不愉快だけどころと爽快な気分になった。

「では御爺様。私は先に屋敷に戻っております。

お帰りの際は、先程お渡しした雑誌に長距離用の転移符が挟んでありますので、そちらをお使いになって下さい。

残念なことに御爺様は現在犯罪集団の長として厳重に監視されております。

そのまま外へ出られますとあつという間に捕縛されてしまいます。

祖父の身を案じるものとして愚考いたしました結果、この方法が最善であると判断致しました。

では屋敷でまたお会いしましょう。

ああ、一応確認しておきますが、

『逃げるなよ糞爺。あんたの大事な腐臭のする誇りにかけて俺を殺しに来い』

、で御座います。

ではこれにて失礼致します」

未だに自らの身に起きた事態に混乱している爺さんに恭しく一礼して、扉に貼った人払いの呪符を剥がして病室を出る。

人払いの呪符がなくなると急に人の気配が濃くなるので、いきなり沢山の人に囲まれたようで気分が悪くなる。

爺さんの病室を教えてくれた看護師とすれ違ったので、改めてお礼を言うついでに「想像していた以上に祖父の様子が変でした。話しがちぐはぐで私のことを化け物扱いしたりと要領が得ません。考えたくはないのですが痴呆が始まっているのかもしれない」と困惑した表情で伝えておく。

看護師から「入院したことで一時的に混乱されているのかもしれない

ません。気を落とさないで下さい」と優しい笑顔で励まされる。正直ちよつと惚れかけた。

本来なら事件の重要参考人である俺が外出することは難しいかと思っていたのだけれども、学園長も他の先生も割とあっさり許可してくれた。

俺の人柄を信用されているらしい。
やはり普段の行いがいざという時ものを言う。

俺が言った条件のこともあり、爺さんと俺、互いに何をするか心配もあるのだろう。
離れたところで監視させてほしいと言われ、別に困ることではないので了承しておいた。

秋山の屋敷に着いてから、衣服や最低限の生活用品、両親の位牌をバッグに入れて、多分大丈夫だと思うが盗まれないように認識阻害の呪符を貼り付けて外に隠す。

十数年住み、良い思い出など数える必要もない無駄に大きな屋敷を一眺めして、屋敷の最奥へと歩み進める。
屋敷に罪はないけれども、どうせ誰もいないのだし勢い任せに襖を蹴り破つたり、障子に穴を空けたりと、はっちゃけながら進み、途中で自分のやってることの阿呆っぷりに酷く落ち込んだ。

でもまあこれくらいいいだろう？

ぜひせ今日でこの場所も無くなるのだから。

第六話：後の祭り（後書き）

平均年齢の高いキャラしかまだ登場しないという。

学園長に視姦される主人公。

「学園長は舐め回すかのように彼の頭上から足先を眺めていた」としずな先生が第三者視点で見えていたとかいないとか。

容姿は当初平凡か美形か迷いましたが、せつかく漫画の世界に来たのだから格好良く描いてあげようと、良く解らない理由で決めました。

主人公やその周りが格好悪いかわりに、原作の方々には格好良く素敵な人物にしたいです。

次回初戦闘。

戦闘描写も駄目っぽい。

何なら書けるんだ・・

『文才買います。金額要相談』

第七話：後の始末（前書き）

なんとか投稿。

想像以上に難しかったです。

こんな拙い文でも読んでくださる方がいることが本当に嬉しいです。

未熟者以下の微熟者ですが、今後ともよろしく願います。

第七話：後の始末

一歩踏み出す度にギシギシと軋む階段を降りて行く。

申し訳程度の照明は足元まで照らすには頼りない。

普通の階段の幅よりも狭く段差も低い為、一段降りる事に度に現れる、何とも言えない違和感が気色悪い。

ひんやりと冷たい土壁に左手をつきながら慎重に階段を降りるのと数分。

観音開きの赤黒い扉が見えた。

黒い鉄製の輪っか型のとつてを左右両方片手づつ掴み引く。

何十年、何百年と変わらず此処に在り続けた為か、扉と壁枠が歪んでいてガリガリと床を削りながら開いていく。

扉の向こうから寒々しい空気が流れ足元を冷やす。閉めきつた空間でありながら黴臭さや埃の混じった感じもなく、むしろ冬山の山頂のようなピンと張り詰めた澄んだ気配がする。

中は真つ暗だが転生して強化された視力のお陰で大まかな広さは把握出来る。

神様空間のように無限の広さがあるわけではなく、小さな市民体育館程度くらいかなって適当に目星をつけ、中へと歩み出す。

中央に淡い輝きを放つ『モノ』があり、恐らくあれが秋山家の神宝である『天之尾羽張（仮）』なのだあたりをつけた。

胡散臭い眉唾ものだと思っていたが、想像を遥かに超える重圧を感じる。

刃渡りは100センチ程で柄尻までの長さを加えると150センチ近くはありそうだ。

片刃だが反りはなく、西洋刀のようにも見える。

日本刀のよう丸鍔がなく、刃先から柄尻まで一つの金属で拵えてあるようだ。

神剣と称されるのは伊達ではなく、眺めているだけで肅々とした気分になる。

木製の台座に鞘もなく抜き身で横置きにされているが、かつて赤ん坊だった自分が触ったことを思い出し、手を怪我したらどうするんだと爺さんへの怒りがまた一つ増えた。

その神剣の前に黒い狩衣姿の老人が座しており、スツと立ち上がり右手を払う動作で、神剣の四方にあつた燭台に火が灯る。

火に照らされた老人の表情は厳しく、背にする神剣のように抜き身の刀剣のような伶俐さがある。

真っ直ぐに背筋を伸ばし、幾年も鍛え上げた体軀は僅かの揺らぎもない。

俺の数十倍もの修行と経験によって裏付けされた一流の術師の姿。

関東秋山家の現当主である俺の祖父の姿がそこにあつた。

張り詰めた空気の中、真一文字に閉じられていた爺さんの口が開く。

「……随分と遅かったな」

『お先に屋敷でお待ちしております』

屋敷の最奥の場所を知らなかった俺は、迷い迷って逆に爺さんを待たせてしまった。

ちょっと申し訳なかった。

まあ、仕方ないと思うんだ。

俺はこの場所に一度も来たことなかったし、それどころか屋敷内に入ったことのある部屋の方が少なかったのだから。

荷物を外に置いてから格好つけて屋敷に入り直したまではよかったが、屋敷内のありとあらゆる部屋を片っ端から探しまわり（住み込みの女中さんの部屋に入る時は少し躊躇った）、もしかしたら地下室かと考え畳をひっくり返すこと数時間。

全く見当たらず、一度外に出て屋敷の裏手に回ったら小さな蔵があった。

そこに先程降りてきた階段があり今に至るといふ訳だ。

屋敷の最奥だと言ってたのに、屋敷の敷地内の奥というのは酷いと思う。

地下で独りきりの爺さんを想像するとかかなり寂しいものがある。

「『逃げるな』と言っておきながら、貴様の方が臆病風に吹かれたのかと思っただが、儂を焦らせて油断させるつもりだったのか？」

「いえ・・・この場所が解らず、屋敷の畳をひっくり返してありました」

「・・・そうか」

何という、いたたまれない空気だ。

爺さんの顔が引きつっている。

「えっと・・・まずは参上が遅れまして申し訳ありません御爺様。全て私の不徳の致すところ。謹んでお詫びを申し上げます」

「今更取り繕くるわんでもよいわ。

あの病室で見たアレが貴様の正体であろう。

慇懃な所作が今となっては薄気味悪いわ」

「いえ、あの時は『これが俺の本質』だと申しましたが、表面的で仮初めで白々しい私もまた私なのです。

十数年御爺様の前でこれで通しておりましたから、この所作を変えるのも今更で御座いましょう」

爺さんはフンと鼻を鳴らし、狩衣の袖から呪符を数枚取り出し俺へと翳す。

「昔から賢しい子供だと思っていたが、よもや外と内を使い分けておったか。

まるで弧狸の類いのようじゃ。

呪術の名門が妖しを産んだとはとんだ笑い種よな」

「妖しは被わねばな」と翳していた呪符を俺との丁度真ん中あたりに放つ。
床に着くやいなや呪符が輝き梵字が浮かび、その光が円を描くように広がる。
爺さんの姿を遮るように身の丈3メートルはありそんな武者鎧を纏った鬼の群れが現れる。

「式神……」

現れた異形の存在に気圧される。

「そつだ。貴様が扱う小鳥の式とは別格のな。」

秋は『悪鬼』

山は『夜魔』

闇に住まう妖魔を統べる者こそ、関東呪術の名門秋山の力よ！」

現実には有り得ない怪物。

幼い頃から修行の為に式を放たれることはあつた。

その式達はどこか愛嬌があり、俺に冗談を言いながら修行をつけてくれていた。

しかし今、目の前に居るヤツらは別格だ。

鈍く光る爪や牙。

俺の胴体の倍くらい太い手足。

ギョロリとした目には俺を殺すという明確な殺意がある。

コイツ等は俺を引き裂き、噛みちぎり、叩き潰すことを躊躇わな
いだらう。

「（怖い）」

握り締めた手が震え、足が膝から崩れ落ちそうになる。口が閉じられず、呼吸が正常に行われていないように胸が痛む。生まれて初めて受ける圧倒的な殺意。

「（殺される）」

死ぬことを怖いと思ったことはない。

痛いとか苦しいとかは嫌だが、死んでしまうことに特別な意味を感じることにはなかった。

病院で患者の死を看取った時も、友人の突然の訃報を聞いた時も、優しかった祖母が亡くなった時も。

表面的には悲しみを演じながら『ああ、居なくなるんだ』と淡々と自己処理をしてきた。

そして自身の死も受け入れていたつもりだった。

自分は消えた方がいい、消えた方が楽だと。

それは死を受け入れたわけではなく逃避。

しかし平和な世界に生き、貧困な想像力しかない俺が死の恐怖を知ることなどなかった。

でもこんな死を想像したことなんてない。

圧倒的な暴力で耐え難い恐怖と苦痛の中で自分が惨殺される最期など想像出来る筈もない。

濃厚な死のイメージが今なら出来る。

今更になって出来た。

「（動けよ！？戦いの準備をしなければ！）」

そう思っても凍りついたように身体が動かない。
爺さんが何か話しているがちっとも耳に入らない。
俺は何をしに来た？

爺さんと茶でもって酌み交わしにきたつもりだったのか？
爺さんは俺を殺しに来てるのにな？
爺さんに殺しに来いと言ったのは自分なのにな？

「（主人公だ！何が戦う姿を見てみたいだ！！）」

俺はこんな世界で生きていける筈がない。

覚悟もない。

理解もしてない。

自分の力を過信して溺れていた。

自分の現実を見ずに自惚れていた。

鬼が一步踏み出したのを見て、俺は弾かれたように後ろへと駆け出した。

「無理だ！無理だ！無理だ！こんな無理に決まってる！！」

歩法も何もあつたものじゃない。

修行の成果は何一つ現れず、ただ逃げ出す為の無様な走り。

圧倒的な脚力で扉まで辿り着き、壊さんばかりに体当たりするがビクともしない。

「何でっ！？俺は強いんだろ！？」

すごい力で転生したんじゃないのかよっ！？」

その気になれば厚さ30センチの鉄板だった貫ける俺の拳でも、

ただの鉄製の扉は凹みもしない。
それでもがむしゃらに叩き続ける。
手の皮が破れ血が滲んでもひたすらに。

「嫌だ・・・こんな嫌だっ！！こんな望んじやいないんだ！！」

誰でも良かった。

助けてほしい。

悪い現実から助けてほしい。

夢の中に沈めてほしい。

「儂がただ貴様を待っていたと思うか？

愚直なまでにただ座していたと思うか？」

爺さんの嘲るような声が耳朶をうつ。

「この神剣の霊力を使い貴様の力に干渉させ、神剣が貴様を封じ込める呪を施してある。

例え儂が神剣を振るえなくとも、その力を引き出す方法がないと何故言える？」

爺さんの言葉をただ聞くだけで理解なんて全く出来ない。

狂ったように扉を叩きつけることしか考えられない。

「魔の力が高い。

気の力が高い。

身体能力が高い。

・・・だがそれだけだ。」

「力があるだけで扱う才能がない。

戦うこと、傷つけること、奪うということが解っていない。
覚悟も責任も理由も目的も何もない」

「『秋山の麒麟児』と自惚れた未熟者。
無様で無力で無自覚な餓鬼」

「『俺を見ていない』だと？
当たり前だ。」

ただ力が強いだけの小僧なんぞに儂が目を向けるものか」

「貴様如き、最初から儂等の為のただの飾り者よ」

「大人しく飾られておればよかつたのだ」

爺さんから言葉が一言放たれる度に、一歩、また一歩と俺の側へと近づいてくる。

強化された聴覚が爺さんの位置を正確に把握する。

「・・・死にたくない！
死にたくないっ！！」

浅ましく意地汚く、死から逃れる為のすべを探す。

「貴様なんぞ失望するにも値せん。
秋山の歴史から永遠に消え失せろ」

風を叩き切るような轟音が頭に響いた瞬間、鬼が振り払った巨大な金棒の一撃が俺の身体を吹き飛ばしていた。

秋山君の屋敷の下から魔力の波動を感じ、続いて大きな地響きが起こった。

「っ！？まさか戦闘が起きたのか!？」

学園長から秋山家当主の病院へ向かう秋山君の監視を命じられ、彼が屋敷に戻るまでずっと尾行を続けていた。

病院内で戦闘行為を起さないだろうと思ったけど、当主が秋山君に危害を与える可能性がある以上無視出来なかった。

何より秋山君自身が自分を苦しめ続けた祖父に対し、何かしないかという不安が拭い去れなかった。

彼が真帆良学園に入学した当初、僕は学園長から彼に接触するように指示されていた。

真帆良と・・関東魔法協会と関東の呪術組織との関係は悪いといった方がいい。

元々、関東も関西も呪術協会とは冷戦状態が続いていて、一部の呪術師による魔法協会への執拗な攻撃は今も絶えない。

僕も警備に立つことがあり、呪術師と戦闘を行ったことが何度もある。

世界樹を求める者や学園長のお孫さんで詠春さんの娘である木乃香君を狙う者。

傭兵まがいの雇われ術師やぐれ呪術師等もいる。

そして中には強烈な印象を植え付けられる者たちがいる。

それが復讐者達。

魔法使いとの間に生まれた悲劇に裏付けられた憎悪に燃える者達。彼等は力の強弱に関係なく命をとって目的を果たそうとする。

撃退し、捕縛しようとしてもそれは叶わない。

そういった者は一人残らず死んでいく。

言葉も思いも届かず、捕縛しようとしても最期に呪詛のような憎悪を吐いて自決する。

そんな呪術師がいることを知っている僕としては、秋山君がどのような人間なのかを把握しておきたかった。

真帆^{マホ}良には守るべきモノが、守りたいモノが沢山あるのだから。

彼を最初に見掛けた時、近くで喧嘩騒ぎが起きていた。

この学園の生徒はみんな活気があり元気があって良いんだけど、羽目を外し過ぎることが多々ある。

そういう揉め事を収めるのも広域指導員である僕の仕事。

この時も数人のやんちゃな男子生徒にガツンと指導してあげた。

お仕置きが終わっ後、彼の姿を探すと面白い物を見たように笑みを浮かべたっけ。

「何か面白いことでもあつたかな？」

と彼に話し掛けると、自分が声を掛けられると思ってなかつのか目を大きく開いて驚いていた。

我ながらちよつと強引な接触だったと思うけどね。

彼は「申し訳ありません。お仕事をなさっておられるのに笑うなど、大変失礼を致しました。真帆良に来てまだ日が浅いのですが、毎日色々な出来事があり、その一つ一つがとても興味深いものでして。

今日は学友の噂に上がるほど有名な高畑先生にお目にかかることができ、少々浮かれ気味だったようです。

生まれてこの方、こんなに賑やか毎日を送ることが初めてで、つい好奇心で覗いてしまいました」

と、深々と謝罪するものだから、今度は僕の方が呆気に取られ、加えていた煙草を落しかけるところだった。

秋山君は小学校に通っていなかったという。

家の方針とはいえ横暴が過ぎるなど内心憤ったけど、隣で街中の全てが興味津々といった様子の秋山君を見ると、これからの学園生活は楽しくやってもらえそうかな、と笑みがこぼれた。

さっきの仕事のことや彼の学友が話していたという噂について説明し苦笑してたら、

「高畑先生は損な役回りをされているのですね。大変なお仕事です」と彼まで苦笑していた。

それからも彼と会う度に世間話をしながら様子を探っていたが、一生徒として真面目に過ごしながら、学園生活を楽しむ普通の少年としか映らなかった。

何度目かの会話時に、僕も魔法関係者だと伝え、何か困ったことがあったらいつでも相談にのると肩を叩く。

秋山君は最初は驚いていたが、次には頭を下げて「私の方こそ、ご迷惑をお掛けして申し訳ありません」と謝っていた。

自身の入学がどのような意味を持つものか理解していたのだろう。本当に申し訳なさそうな顔が印象に残った。

今思えば、祖父の命を受けて真帆良学園にすることが苦痛だったんじゃないかと思える。何もかもが初めてで楽しいということは、何もかもを与えられていなかったということだ。

中等部一年のおわりに彼が語った秋山家の計画や彼の境遇を聞いた時は、話す内容への驚愕と彼の置かれていた状況を解ってあげられなかった自分の不甲斐なさに憤りを感じた。

そして表面上で普通を必死で演じている彼が哀れだと思つ反面、薄ら寒く感じられた。学園長も同じように感じたのだろう。

彼は・・秋山君は、その在り方が危うい。些細な道の踏み外しを取り返しのつかない致命的なものなる程に。

それは憎悪に満ちたあの呪術師達と同じ、他者も自分も破滅へと導く道に繋がっているような気がしてならなかった。

屋敷の中へ飛び込み彼を探す。

屋敷の床まで荒らされているのが少し気になった。

さっきの感覚だと彼は地下にいるはず。

屋敷の中で人の気配を探すが感じられない。そこに再び地響きが鳴り、外で爆発音が響く。

「くそつ、屋敷の外だったか！」

手入れされた庭を突っ切り音のした方角へと向かう。

目の前に小さな土蔵を見つけたと同時に、土蔵の中から慌てふためきながら老人が走ってきた。

見覚えのあるその顔は秋山君の祖父で間違いなかったが、汗や涙などでぐちゃぐちゃにしながらで酷いことになっている。

その様子もおかしく、木々のざわめきや屋敷の影、果ては自分が走りながら蹴った小石のぶつかる音にまで怯えている。

完全に恐慌状態だ。

僕が近づくとそれに気づいて、一際大きな叫び声を上げて白目を剥いて気を失ってしまった。

何がどうなったらこんな状態になるのか・

とりあえず秋山翁を捕縛しようとして近づいた時、また大きな地響きが起こり、僕の背後で地面がズスツと崩れ、振り向くとまるでB級映画のようなチープさで屋敷が地面に沈んでいた。

木材が折れる音や瓦が屋根から落ちて割れる音が響く中、血で制服を汚した秋山君が土蔵から出てくるのを見つけた。彼の表情を見た時に解ってしまった。

僕は間に合わなかったのだと。

左半身を暴風のような衝撃が襲い、勢いそのままに全身を壁にぶつけた俺は、何というか・・その、頭の中がすっかり冷めきっていた。

常人ならば確実に死んでいるであろう一撃に『あ、俺、絶対死んだ』と先程まで散々死にたくないと喚いてたのが嘘のようにあっさり死を受け入れてしまい、『死んだらまた神様のところに行くのかな？』とか考えながら壁に突っ込んでいった。

神剣の霊力補正で頑丈になっているのか壁に傷はなく、転生補正で頑丈になっている俺は左腕の骨折と全身打撲、頭部からの出血、あと擦過傷がちらほら。

この程度で済んで良かったと思えばいいのだろうけれども痛いもんは痛い。

『この程度大した怪我じゃねえ』なんて漫画の台詞なんか言えそうにないし、こんな状態になることで『原作キャラってスゴいなあ』と認識を新たにした。

痛みは生きている証拠らしいが、こんなに痛いのなら死んだ方がマシだと言いたくなる。

死にたくないを連呼していた俺が言うと言得力は皆無だが。

あんまりな自分の醜態を思い出すと、無様過ぎてやっぱり死にたくなるのでこれまた実にシユール。
もう何も考えない方が良さそうだ。

頭部の出血止まらずが目に入りそうなので右手で拭おうとするが、その僅かな動作が痛みを激増させ、全身が硬直してしまう。

これは傷を治さない限りと動くこともままならない。

爺さんが、俺が身じろぎしているのに驚いているようだ。今は無視。まずは怪我の状態をなるべく正確に把握する。

骨折部位は左上腕骨のみ。外部への開放なし。

金棒の突起が当たった場所からの出血はあるが、神経や動静脈を傷付けた兆候はなし。

打撲や擦過傷は確認するだけ無意味。

頭部は壁にぶつかった際に左前額部を裂傷。

流石に頭痛はするが、目眩、嘔気、視界の変化もなく、意識も清明。頭部の外傷は後から症状が出るから油断は出来ないけど。

・・・

「ん・・・なんか思ったより大丈夫そうだ」

「生きておるだけでも奇跡的なのに『大丈夫そう』とは、いよいよ妖し染みてきたな」

驚愕の色を更に濃くした顔の爺さんが再度俺に鬼を向ける。

独り言が窮地を招いた。

「何言」も口に出すには注意が必要である。

「丈夫な身体に産んでくれた母には常日頃から感謝しているよ・・・」

今生では逢うことさえ叶わなかった産みの親。

親を産むことで死なせてしまったという罪悪感、今もなおつきまとう。

亡き両親がもし生きていたとしたら俺は変わっていただろうか・・・

母に対し、俺を産む為の道具発言をした爺さんだ。
俺と一緒に不遇な思いをさせられたかもしれない。

そんなことを考えながら。
背を壁に押し当て両脚を踏ん張り、痛みに喚く身体を立ち上がらせる。

「っう・・・!!」

覚悟も責任も理由も目的も、俺には何もないかもしれない」

願ったのは癒やしのみ。

痛みを和らげ、苦しみを遠ざける力。

「だったら・・・俺に何もなければなら借りてくるだけさ。
偽物でも上辺だけでも見せ掛けでも・・・」

二度と間違わないための力。

正しい知識と正確な技術。

それを扱う意志は足りないままだ。

でも・・・

「使えるモノは使わないとな」

正常な人体の構成を思考する。

筋組織、骨組織、血管や神経の走行、各種臓器や骨格の形と位置。

呼吸、循環、体温などなど、理想的な健康状態を思い浮かべる。

「非科学的で胡散臭い上に、反則で卑怯で不条理にも程がある力だ
けどね」

俺が神様に最後に頼んだ「最強」の力。

「『清らかなる生命の風よ、天空に舞い邪悪なる傷を癒せ！
ケアルラ！』」

淡い緑色の輝きが全身を包む。
傷が癒え、痛みが消える。
何となく爽快な気分になってくる。

「な、なんだそれはっ！？
西洋魔法か！？」

そんな魔法、見たことも聞いたことない！！
一体何をした、運っ！！」

今日は朝から驚きっぱなしだな爺さん。
さぞかし心臓に悪い一日だろう。

「はつきりと見せたのは初めてだな。
この世界の魔法、呪術のどれにも属さない異端の証明。

これが俺の『魔法』だ！！」

「異端の力だと・・・」

身体をペタペタ触り傷が残ってないかを確かめる。
関節の動きや四肢の神経伝達の異常の有無も問題無し。

改めて異常な力だと実感する。

「そう、異端の力。
きつと理解は出来ないだろうから、『不思議パワー』くらいに思っ
たらいいさ」

そついやいつの間にか爺さんに対する口調が変わってるな？
感情がたかぶったり状況が逼迫するところなるみたいだ。

「残念だけど爺さん。」

俺は今から、爺さんの長年の経験と実績と成果を台無しにする。
研鑽の果てに辿り着いた一つの境地を無碍にする。
精々、困惑して諦観して絶望してくれ」

そつ言い放ち、両脚を開き腰を落とす。
半身を開き、爺さんに向け右手を腰ために構える。俄か拳法の構え
だがこの方が気合いが入る。

先程俺を吹き飛ばした大鬼が再び俺に向かってくる。
今も怖い。俺の血がついた金棒を見るだけで身が竦む。
怖い輩は近づけないに限る。
嫌なものは遠ざける。

右の拳に力を込め身体を土台に右手を大砲に準える。
重心を落とし地を割る勢いで踏みつける。
腰、肩、腕を引き絞り・撃ち抜く！

「『渦巻く怒りが熱くする！これが放吼の臨界！波動撃！』」

突き出した拳から放たれる気の弾頭が大鬼の鳩尾を打ち抜き、俺
がそつなったように背後から壁に激突。
部屋を揺らすほどの衝撃と轟音を響かせる。

うつ伏せに倒れ込む大鬼が地面につく前に光となって霧散する。

「馬鹿な・・・」

爺さんが茫然として背後に気をとられている隙をつく。

攻撃魔法の威力がどれくらいか解らない以上、地下では無闇に使えない。

ならば気の力で、拳の術をもって打ち倒す。

「『界王拳つ！！』」

体内で気を爆発させ全身の能力を一気に向上させる。

地を蹴り抜き、今の俺の最速をもって鬼共を討つ。

接近すればまた恐怖に身体が強張るかもしれない。

だから近寄らない。一定の距離を保ち最速で動き続けのを絞らせない。

そして奴らの射程外から・・・

「『波動撃！』」

確実な一撃を放つ。

強化された五感が相手の動きを捉える。

高速移動中であつても十分に狙い撃てる。

鬼共の数なんて数える余裕はない。

心臓がバクバクし、今この瞬間も怖くて足が止まりそうになる。

闘争本能と逃亡願望。

冷静にがむしゃらに。

自分以外に動くものを全滅させるまで機械作業を繰り返す。

牙を剥き出しにした鬼の顔面に気弾がぶつかる。

衝撃でへし折れた牙が地面に落ちる頃には鬼の姿は消え去っていた。漸く最後の鬼を倒し足を止める。

途端に脱力感が押し寄せ、膝をつきたくなるのを腿を叩いて堪える。吹き出る汗が乾いた血のあとを再び湿らせ、薄赤い水滴になって滴り落ちる。

無我夢中だったので爺さんのことを忘れていたが、神剣の台座に
よるよるとふらつきながらもたれかかっていた。

顔を筋肉の緊張を無くしだりとした覇気のない表情をし、随分
と草臥れてしまった狩衣を纏う身体は活力を削ぎ落とされ年齢以上
の老け込み方をみせる。

「何故だ・・・有り得ぬ・・・秋山の秘術がこうも容易く・・・」

「御爺・・・爺さん。」

もう終わりだ。秋山もあんだも。全て何もかもが・・・」

俺の言葉に反応し顔をあげ、血走った目で睨みつけながら身体を
左右に揺らし俺へと近づいてくる。

「終わらぬっ！秋山の歴史はっ、俺の悲願は決して終わりはせんっ
！！」

そうだ・・・蓮、お前のその力があれば必ず叶えられる・・・

ふふ、まったく何で今まで黙っておった、ふふ、まったく・・・

なあ、蓮よ、俺と秋山を盛り立てよう？

お前さえおればそれでよい、なあ蓮、蓮よ、俺に力を貸しておくれ
・・・」

さながら幽鬼のように俺に縋り、力無い嗚れた声を漏らす。節くれだつた指が俺の顔を撫でる。

そう言えば爺さんが俺に修行以外で触れるのはこれが初めてかもしれない。

腹ただしいのに。

恨み辛みは数えきれないほどにあるのに。

俺の心の中は悲しくてしかたなかった。

爺さんをこんな風にしたのは俺だ。

俺が力をもって生まれたから、諦めかけていた野望と復讐心に火が灯った。

俺がいなければ、爺さんが暴走じみた行いをしなかったかもしれない。

俺がいなければ、爺さんは偏屈な人間でしかなかったかもしれない。

そう思うと酷く悲しい。

「なあ、爺さん。昨日の朝、仏壇の前で俺と話しをしていた時のこと覚えてる？」

俺の頬に触れる爺さんの手に俺の右手を重ねる。

そうしながら左手で制服のブレザーから呪符を一枚取り出し爺さんにみせる。

「あの時さ、これと同じようなやつを使ったんだ。

『夢邪睡符』っていう、人を昏倒させる俺の呪符」

何かを察した爺さんが俺から離れようとするが、頬を撫でていた腕を掴み逃がさない。

「なあ、爺さん・俺さ、思うんだよ。
強い力なんて持たない方が良かったんで。
力なんて求めない方が良かったんで。」

爺さんは臆病な人間であれば良かったんだよ。
失ったモノを奪い返すんじゃなく、今あるモノ、残ったモノを大切に守れば良かったんだよ」

俺を振り払おうと爺さんは抵抗を続ける。

握りしめられた拳で先程まで撫でられていた俺の頬を打ちすえる。

「ごめんな、爺さん。」

でもこうしないと、爺さんはまた誰かを憎んで恨んで傷つけようとするから。

だから・怖いものから逃げられるようにする。

自分を守る為に力を持つんじゃなく、ただひたすらに逃げ続けてほしい。

惨めで弱い臆病な人間になってくれ・・・」

左手に握る呪符に力を込める。

呪符が輝いて、中心に臆病者を表す鶏の絵が浮かびあがる。
必死に懇願し罵倒し殴打する爺さんに翳す。

「『小さき者、弱き者、死に急ぐ者、身を守る術を思い出せ・・・弧
鶏鼠！』」

術の発動により呪符が白く輝き、そして消える。

眩しさに目を閉じていた爺さんが再び見開いた途端、俺の姿に怯えて尻餅をつく。

「ひ、ひいいいつ！！？た、助け、助けてくれえ！！」

自分を害するもの、恐怖心を駆り立てるもの、微かな変化にすら怯え震える。

心の強さを奪い取り、立ち向かうことなくただ逃げる臆病者。

『弧鷄鼠』の術により最早爺さんが何かを成すことはない。出来はしない。

まるで大鬼から逃げていた俺のように、爺さんは扉へと一直線に駆けていった。

爺さんの術が切れたのか、鉄の扉はあっさり開き、身体を壁や階段にぶつけながら去っていく。

「ごめん・・・」

やるせない気持ちが消えない。

あんなに憎らしかった爺さんなのに、罪悪感と後悔が波のように押し寄せて、何を許してほしいのか解らないまま謝罪の言葉が口をつく。

秋山家は終わった。もう爺さんに縛られることはない。

呪術一派についても学園長や先生方が後処理をしてくれるはずだ。

俺のすべきことはもうない。

後は好きに生きていけばいい。

なのに少しも心が晴れない。

真帆良学園にいけば、あの煩くも楽しい場所で生活すれば変わるだらうか。

強く優しい生活方と過ごせば、また憧れの中で生きることが出来る

だろうか。

「帰りたいな・・・」

あの優しい人達のところに・・・
温かく明るいあの場所に・・・
憧れの舞台に・・・

戻れないと解つていても・・・

「っ！なんでだよ、ちくしょうっ！

ちくしょうっ！

ちくしょうっ！

ちくしょうおおっ！！！！」

神剣を掴み力任せに台座へ振り下ろす。

台座を壊して壊して壊しつくして、神剣を叩きつけるように床に突き刺す。

荒れた息を落ち着かせたあと、少しでも気分を変えたくて地上へ戻るために扉まで進んだ。

帰り際の階段で、ふと、この最奥の位置が屋敷の真下になることを思い当たり、扉へと向き直る。

元々そのつもりだったのだから、この空間を利用するのが手っ取り早いだろう。

両手を斜め上の天井へと翳し、むしゃくしゃする気持ちのまま、乱暴に魔力を込める。

「『地の底に眠る星の火よ、古の眠り覚し、裁きの手をかざせ！』」

「何もかも全部吹っ飛んじまえっ!!」

「ファイガアアアっ!!!!!!」

天井に向かって放った巨大な火球が爆散する。

最奥の天井だけでなく、床も壁も飲み込まんとする破壊の奔流から俺は死に物狂いで逃げ出した。

宣言通り、むしゃくしゃしてやった。

後悔も反省もしている。

第七話：後の始末（後書き）

初戦闘の回でしたが、描写が薄いですねえ……
界王拳がムリヤリ過ぎたなあ。

相手と接近してないせいか、書いているうちに敵が居なくなるとか・
これも主人公が躁鬱気質でへたれなせいだと責任転嫁をしておきま
す。

タクテイクスの魔法や術の効果や威力については少々独自解釈が入
っています。

次回、展開次第で女子生徒が勢いで、もしかしたら、何かの弾みで
登場するかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7202y/>

自分らしい生き方を

2011年11月25日00時01分発行